大正女子國文讀本

第二修正版

上級用巻下

4b
810
大14

42198

教科書文庫

4
810
42-1925
20000
90368

資料室

大正十四年一月十五日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科用

40
810
大14

保科孝一編

大正女子國文讀本

東京 會資社育英書院發兌

広島大學
教
90368
図書

大正女子國文讀本 上級用 卷下

目次

一 月雪花……芳賀矢一……一
二 月は世々の形見……室鳩巣……七
三 女子と歌……佐々木信綱……一三
四 詩二篇……一五
一 竹……竹友藻風……一九
二 青空……三木露風……一六
五 小野の御室……（伊勢物語）……一八
六 三船の才……二一
一 藤原公任……（大鏡）……二一

二　源經信……尾崎雅嘉　三
七　流泉啄木……源隆國　二七
八　大原御幸　その一……（平家物語）　三〇
九　大原御幸　その二……三四
一〇　日野山の閑居……鴨長明　三八
一一　落花の雪……（太平記）　四四
一二　隱岐の小島……（增鏡）　五〇
一三　父母のおしへ……五四
一　娘の嫁する時訓誡の文……江川英龍　五四
二　六諭衍義をすゝむる文……馬場存義　五六
一四　我が家の晩餐時……西村伊作　五八
一五　一衰一盛……落合直文　六三

一六　田子の浦曲……井上通　七二
一七　羽衣……（觀世流謠曲）　七七
一八　草庵の芭蕉……荻原井泉水　八三
一九　奥の細道……松尾芭蕉　八八
二〇　夢のあと……白鳥省吾　九四
二一　元祿調……九七
二二　千里が竹　その一……近松門左衞門　九八
二三　千里が竹　その二……一〇三
二四　芳宜園大人の靈を祭る……村田春海　一〇七
二五　富士の嶺を詠める歌ども……清水濱臣　一一〇
二六　ボンフキールド女史……鶴見祐輔　一一四
二七　光あれ……姉崎正治　一二〇

大正女子國文讀本 上級用卷下

一　月雪花

煌々たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照らす。月の光は溫和で、日光の如く峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、羣陰皆影を伏して、大小の有象・無象悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで貴賤貧富の差別を失はせて了ふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴なはない淸冷の光である。　皎潔・無垢・崇美と稱ふべき、やさしい光である。休息・安靜の夜には最もふさはしい。此の光に對しては、誰しも人生の

慰藉を感ずる。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帶の椰子の影、寒地の氷の家、眺める人々の心は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の、人の胸懷にしみ渡る事は、恰もその影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものであらう。「うちむかふ月は一つの影ながらうかぶはちゞの思なりけり」である。

うちむかふの歌　荷田蒼生子（クミコ）の作

東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、此の光に向つて訴べられた。これを嗟歎し、これを吟咏した詩歌の感吟は、世界各國の言語に充ち滿ちて居る。天文學者は云ふ「月は地球の衞星で、全く死んだ冷塊である。」と。此の冷たい光が、古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又現に與へてゐるか。月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層つめたい。貧富貴賤の差別なく、其の純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓も茅屋も皆同じ色に埋められる。「花ならば咲かぬ梢も交らましなべて雪降る三吉野の山」と云ふやうに、眼に入るもの悉く其の下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色十二樓臺玉作層」の美觀は一切人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を懷かしめる。天から落ちて來る此の純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川水を殘して、山といはず野といはず、またゝく中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉色々のながめはもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新綠の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變

花ならばの歌　新續古今集僧仙覺の作

三千世界銀成色の句　唐の詩人白樂天の詩句

廣寒宮　月の中にあるといふ宮殿

極樂淨土　佛教に、衆苦なく諸樂を受くるといふ國

化の奇、造化の巧を盡したものではないか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほど樂しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり咲亂れるのは、人生としてあまりに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい匂さへもつて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花が、價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じやうに、一文錢をも要しない。人生に花がなければ、どんなに寂寞を感ずるであらう。

閑寂を旨とする茶室の內にも、床の間に一輪の花は必要である。

花をし云々　年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし（古今集藤原良房）

山櫻の歌　新古今集、康資王の母の作

冬ながらの歌

これは寧ろ花を貴んで、其の濫用を愼んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺は、其の皎潔を愛し其の淸淨を貴ぶが、花は其の艶麗華美を以て、人生を飾り人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗華奢等の語は、皆花に基づいた語である。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余はたゞ「花をし見れば物の思もなし」といふ古歌を以て、すべて總括し得ると信ずる。月雪花三つのながめは、各その特長がある、いづれを前いづれを後といふことは出來ぬ。

山櫻花の下風吹きにけり
　木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪に喩へたのである。

冬ながら空より花の散りくるは

古今集、清原深養父の作

雲のあなたは春にやあるらむ

これは雪を花に喩へたのである。

笠は重しの句　謠曲、葛城の中にある

笠は重し吳山の雪、鞋はかんばし楚地の花。肩上の笠には無影の月の傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とに喩へたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪を賞でぬ人も無い。

アイスランド　北大西洋中にある島

思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は卽ち人の家である。この地方の人には、寸紅の目を樂しましめる物も無い。之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見た事はない。瓦斯・電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋・冬の半年は美しい月の光を見る事が出來ない。我等日本人が、昔も今も此の三つの

世々を經ての歌　伊藤仁齋の作

年々歲々の句　唐の劉廷芝の「代悲白頭翁」の詩の句

芳賀矢一　文學博士、前東京帝國大學教授

翁　鳩巢を指す

例の人々　弟子達

眺を擅にする事を得るのは、眞に天賦の幸福ではあるまいか。月雪花の眺は、古今の歷史が加つて一層の感興が增す。「世々を經て眺めし人の數にまた我をもゆるせ秋の夜の月」月は古來の歷史を照す鏡である。「年々歲々花相似、歲々年々人不同。」人生の感は花を見てます〳〵繁く、雪を見ていよ〳〵多い。二千五百年以來、月雪花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしめるよ。

（芳賀矢一――月雪花）

二　月は世々の形見

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋の氣色たちて、荻吹く風も身にしむ頃なり。「久しく翁のがり行かねば、此のほどの老のねざめも覺束なし。いざ、訪ね問はん。」とて、ある夕暮に、例の人々打ちつ

れて來りしが、「またも參らん。」とて歸らんとせしを、翁とゞめて、「今宵は月もよし。薄酒進め奉らん。しひてとまり給へ、」といへば、「翁の心をいかで背くべき。さあらば。とて各座をしめて、淸談の露やうやう繁きほどに、家人やがて心得て、取りあへぬまでにあるじまうけし、肴とりそへて、盃出しけり。諸客みな醉うて興に入るとぞ見えし。其の中に一人盃を停めて、「青天有月來幾時、我今停盃一問之。」と、李白が詩を高らかに打吟じけるを、又二人傍よりつけて、「人攀明月不可得、月行却與人相隨。」と歌ふ。又外の人々互に唱和して其の次を歌へば、翁も聲を合はせて歌ひをさめけり。其の後數獻に及びて玉山倒るゝばかりに見えけり。

翁いふやう、「さて『大方は月をもめでじ』とはよみたれども、老の心も月みるにこそなぐさみはべれ。されどそれにつけて、千載無窮の感も起りぬれば、むべ、月を、『人の老となる』ともいふべかめり。但し

青天云々　李白の把レ酒問レ月と題する詩の首句

李白　支那、唐代の詩人

大方は云々　大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの（古今集）

月を見るにはいろ〳〵あり。今思ひ出し侍る。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、ひとり隅にむかひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつく〴〵と見て、『月はわたり幾尺かあるべき。各考へて見給へ。』といふ。又同じやうの人、かたへより、『あれは物の切口と見ゆ。奥へ長さいか程かあらん。』とて、互に僉議しけるを、聞く人々皆舌を食ひけり。翁も幼心にをかしかりき。

室鳩巣

今思へば、世俗月を賞して、光のあかきをほこり影の淸きにめでて、良夜とてたゞ打寄り、物食ひ酒のみなどして、歌ひのゝしるを樂みとするは、かの寸尺を語るに等しかるべし。又騷人・墨客の月を詠めて、字毎に金玉を彫り、句毎に

杜甫　李白と殆ど同時代の詩人

古人今人　把レ酒問レ月の詩の一句

楚辭　支那、楚の屈

綿繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、それもたゞ景氣の上を翫ぶばかりにて月に深き感ある事をしらぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、我等古人を慕ひて、其の書を讀み、其の心を知りつゝ、常に世を隔てたる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照らし來て今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して昔を偲びては、さながら古人の面影も映るやうに覺え、月は物言はねども語るやうにも覺え、忘れては昔の事をとはまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣を捨てて、一氣に古今を洞觀して『青天有レ月來幾時』といひ出づるより、氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべきことがらにあらず。昔より李・杜とて、杜甫が上に稱するもことはりにこそ侍れ。然れども李白の詩も『古人今人如二流水一』を感ずるまでにて、後代を待つの心は見えず。翁昔楚辭を讀みて、『往者余弗レ及、來者吾不レ聞』といふに至りて、屈子が心

原の作つたもの

屈子　屈原のこと。楚の懷王に仕へて寵を和たが、後讒せられて自殺した

あつらへ告げらる　云々　吹く風にあつらへつぐるものならばこの一本はよきよといはまし（古今集）

をおしはかりつゝ、感にたへずなん覺えき。此の二句の意を思ふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠に我が心を得たれば、あはれ、一たび逢うて語らんと思へど、其の世に及ばねばかなはず。又末の世にさる人こそありて、我と心を同じうすらめと思へど、其の人を聞かねば誰とかしらんとぞ。

是なん屈子に限らず。古今心あるきはは、大方此の恨なきにしもあらず。翁も此の心にして月を見るにや、いとゞ感深く覺ゆるなり。もとより今は末の世の昔なれば、いづれの世にか、又我が如く月に對して、今をしのぶ人もやあらん。月はさこそ其の世をも照らすらめ。もしあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をものこさましとおもひ侍る。その心を、

月見れば末の世までもしのばれて
見ぬいにしへのいとゞゆかしき

こゝをもて翁が『月に無窮の感あり。』といへるを、諸君考へ見給へ、いはれなきにはあらず。」

（室鳩巣――駿臺雜話）

室鳩巣　名は直清。江戸幕府の儒官　享保十九年歿　七十七歳

三　女子と歌

み空に星の光なく、地上に花の色香なくば、いかにこの世は寂しからん。人に歌といふものなくば、いかに人の世は寂しからん。星の光をつめたしとは誰か言ふらん。花の色をはかなしとは誰か言ふらん。其の花のうるはしき姿に打ちむかふ一時ぞ、塵の世の塵の思も忘られて、人は神にぞ近づくなる。その遠き星の光にあくがるゝ時ぞ、人はこの現世のはかなき假初のものならぬ事をも知りえて、行末遠く思をぞ馳するなる。かくてぞ人は清められ、また高めらるゝなる。まして奇しく妙なる人の心の、輝きては星よりもきよく咲きては花よりもうるはしき歌といふものばかり、尊きものはあらざらん。されば近世の國學者橘守部が、人の心を樂器にたとへて、歌よまぬ人の心を、「鳴らぬ琴、音せぬ笛の如し。」と言ひけん如く、まことに、星輝き花さく世に、そをうるはしと感じ、あはれと思ふ心もてる人にして、歌よまざらんばかり口をしきはあらざらん。こはなべての人に亘りていへる事にて、もとより男女と別ちいふべきにあらねども、これを我が國の歌といふものにつきて見るに、あるは國語の性質、あるはそのさゝやかなる詩形などの故にや、優しく細かき情をのぶるにふさはしければ、もとも女子に適したりとやいふべからん。されば、また歌學ぶことによりて、かりそめに見すぐしし雲のたゝずまひ、草木のさまなど、天地のさまの姿にも心とまるやうになり、悲しき、樂しきくさ〳〵の人の世の事わざにも心動きて、女子が本來のうるはしきさがを養ひうるよすがともなるなり。されば歌よむことは、また女の身に學ばでは

橘守部　江戸の國學者　通稱北畠源助　嘉永二年歿、八十九歳

かなはぬわざといふべし。

さらば歌は如何にして學ぶべきぞ。まづつとむべきは歌よむ心ばへを養ふにあり。歌よむ心ばへとは何ぞ。さきにのべし天地のあらゆることより、人の世のわざの何につけてもあだに見すぐさで、いたるところに、ふかきあはれたへなる趣を、心にこめて見とむる事なり。この心ばへこそ歌よむに最も必要なることならめ。これだに養ひえたらんには、その言葉につらね、句につゞりいづるわざに於ては、或は師につくも可、書によるも可。自らおほくよみ試み、古今のすぐれし歌をたえずよみ味ふに於ては、女子のおのづからの優しく細やかなる性は、これと共に養はれ、これと共にあらはれいでて、星の光の如く清く、花の色の如くうるはしき歌よみいでんこと難からじ。

（佐々木信綱）

佐々木信綱
竹柏園と號す歌人、國文學者。東京帝國大學講師

四　詩二篇

一　竹

竹の莖　むらさきに染み
雪消えの庭にすぐ立ち
すみ渡る空をあふぎて
そよ風に葉をゆるがせり

あなあはれ　うすきむらさき
ほのかにも春を慕ひて
夕されば涙さしぐみ
あらし吹く夜をや泣きにし

撓やかに勁き莖かな
けふ　こゝに　いのちあふれて
ほそき葉の葉末の露に
力あるおもひを示す

そのひと節　切りて吹きなば
春秋のうれひ　よろこび
さながらに　ひよう　ふりやうと
鳴りぬべき竹のむらさき

竹友藻風
現代の詩人

二　青空

青空の

（竹友藻風――現代詩集）

高きところ
鈴形の鐘　懸かる

あはれその
鐘の音よ
こゝろに染みてひゞく

鳴り　鳴りて　一の聲は
望の果てに
ひろがりゆき

鳴り　鳴りて　二の聲は
朝日に覺めし村々と　都の方の

なりはひの中に落つ
あはれその
鐘の音ぞ
飛躍と和平とを傳ふなる
氣晴れ
深碧の高きところ
鈴形の　鐘懸る

（三木露風――現代詩集）

三木露風　現代の詩人最近羅風と改めす

五　小野の御室

昔惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬

惟喬親王　文德天皇第一の皇子

山崎

山城乙訓郡

水無瀬　攝津三島郡

右馬頭　在原業平

交野　河内國北河内郡

渚の院　惟喬親王の別業

といふ處に宮ありけり。年毎の櫻の花ざかりには、その宮になむおはしましける。その時、右の馬頭なりける人を常に率ておはしましけり。狩は懇ろにもせで、大和歌にかゝれりける。今狩する交野の、渚の院の櫻殊におもしろし。その木の下におり居て、枝を折りて插頭にさして、上・中・下みな歌をよみけり。馬頭なりける人、

世の中にたえて櫻のなかりせば
春のこゝろはのどけからまし

となむ讀みたりける。又或人の歌、

散ればこそいとど櫻はめでたけれ
憂き世になにか久しかるべき

とて、その木の下は立ちて歸るに、日暮になりぬ。夜更くるまで物語して、さてあるじ歸りて宮に入らせたまひぬ。夜更くるまで物語して、さてあるじの皇子入りて、大殿ごもりたまひなむとす。十一日の月も隱れな

むとすれば、かの馬頭よめる。

あかなくにまだきも月のかくるゝか
山の端にげて入れずもあらなむ

かくしつゝまうでつかうまつりけるを、皇子おもひの外に御髪おろさせ給ひて、小野といふ處に住みたまひけり。正月に拜み奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。強ひて、御室にまうでて拜み奉るに、つれ〴〵といと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、古の事など思ひいできこえけり。さても侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、え侍らはでゆふぐれに歸るとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや
雪ふみわけて君を見むとは

とてなむ、泣く〴〵來にける。

（「伊勢物語」に據る）

小野　山城の國愛宕郡。八瀬大原一帶の稱

伊勢物語　和歌を主とし其の詞書のやうにして小さな物語を多く記したもの。在原業平の作といはれるが明かでない

入道殿　藤原道長

大堰川　丹波保津川の下流、嵐山、松尾をすぎて桂川となる

公任　關白藤原頼忠の子。四條大納言と稱す、長久二年薨、七十六歳

六　三船の才

一　藤原公任

ひととせ、入道殿、大堰川の逍遙せさせ給ひしに、作文の船管絃の船・和歌の船と分たせ給ひて、その道にたへなる人々を乘せさせ給ひしに、公任の大納言殿まゐり給へるを、入道殿「かの大納言、いづれの船にか乘らるべき。」と宣はすれば、「和歌の船に乘り侍らむ。」と宣ひて、その船に乘りてよみ給へり。

小倉山あらしの風の寒ければ
紅葉のにしき着ぬ人ぞなき

申しうけ給へるかひありて、遊ばしたりな。御自らも宣ふなるは「作文の船にぞ乘るべかりける。さてかばかりの詩を作りたらましかば、名のあがらむ事もまさりなまし、口惜しかりけるわざかな。

大鏡　文德文皇から後一條天皇までの事を記した假名文の歴史

さても、殿の、「いづれにとか思ふ。」と宣はせしこと、われながら心おごりせられし。」とぞ宣ふなる。一事のすぐるゝだにあるに、ましてかくいづれの道にもぬけ出で給ひけむは、古も侍らぬことなり。

（「大鏡」に據る）

二　源經信

承保三年　白河天皇の御時

承保三年十月、白河院大堰川に行幸ありける日、詩歌管絃の三つの船をうかべて、その道々の人をわけて乘せられけるに、源大納言經信卿見えざれば、主上の御けしきことの外あしかりけるが、しばし後れて參られけり。この經信卿は、詩も歌も管絃も、三事ながら兼ねまなびたる人にて、河のみぎはにひざまづきて、「いづれの船なりともよせ候へ。」といはれたるは、時にとりていみじかりけり。かくいはんとて、わざと遲く參られたるなるべし。さて管絃の船に乘りて、詩と歌とを獻ぜられたり。「三船に乘る。」といひしはこの事なり。

經信　道方の子。權大納言兼皇后宮太夫、太宰權帥、世に桂大納言と稱す　承德元年（一に永長元年）薨、八十二歳

帝　白河天皇

先に大納言公任卿も三船にのられたる事ありければ、この兩人を、「三船の才人」とぞいひ傳へける。

信明・信義　博雅の子。共に琵琶の名人　信義が特に名高い

經信卿もとより管絃の道に妙なりければ、ある時、帝、經信を召され、琵琶の名器たる「玄象」と「牧馬」とをとり出でさせ給ひ、まづ牧馬を彈かせさせ給ひて、問ひてのたまはく、「この二つの琵琶、いづれかまされる。」と仰せられけるに、經信奏せられけるは、「昔一條院、源信明・信義兄弟をめして、この二つの琵琶を彈かしめ、こゝろみ給ひしに、信明玄象を彈き、弟の信義牧馬を彈き侍り。しかるに、牧馬まさりて聞え侍りければ、再び兩人をして、二つの琵琶をとりかへて彈かしめ給ひしに、こたびは玄象まさりて聞え侍り。しかれば、器物の優劣あるに侍らず、彈く人の巧拙によりはべり。」と奏せられければ、帝げにもと思しめされ、また玄象をも彈かしめ給ひしに、果してその詞の如く、いづれおとりまさりあらざりければ、大いに感ぜさせ給ひ

宗俊 藤原宗俊。笛の名人。白河天皇時代の人

政長 源政長。笛の名人。堀河天皇の師

秋風樂 唐より傳來した舞樂の名

蘇合 天竺から傳來した舞樂の名 蘇合香の略

けりとぞ。又或年の十一月ばかり、月明かりける夜、經信卿をはじめとして、宗俊卿、政長朝臣等、樂人三四人伴なひて、おのおの車に乘りて、五節の命婦といふ官女の、今は世をそむきて、嵯峨に隱れ住める家に行きけり。柴の戸を入りて見れば、物あはれにて、板屋のところ〴〵荒れたるに、軒のしのぶ草をわけてもり來る月の、簾の内までさし入りて隈なきに、香染の几帳をおし出でて對面したるけしきは、誰も〳〵心すみておぼえたり。さて、秋風樂・蘇合などの曲をつくして奏しけるに、涙おとさぬ人なし。樂終りて管絃

秋風樂　蘇合香

麗景殿の女御 藤原延子。右大臣頼宗の女 後朱雀天皇の女御

からごろもの歌 新勅撰集にある紀貫之の歌 朗詠集にも出てゐる

はじまる。經信卿琵琶を彈かれ、あるじの尼君も、琴かきあはせられたるに、誠に人々涙にむせびて、宵の樂の時には勝りて面白かりけり。かくて夜明けにけれど、日の出づるほどまで歸りもやらず興に入りけり。

このあるじの尼は、もと麗景殿の女御に仕へたる女房なり。またともなきすきものにて、朝夕琴をさしおく事なかりけり。それを經信卿の執して、かく人々伴なひてとぶらはれたるなり。また經信卿、八條わたりに住まれけるころ、九月ばかりに月あかかりける夜、空をながめて居られしに、きぬたの音のほのかに聞えければ、

からごろもうつ音きけば月清み
まだねぬ人をそらにしるかな

といふ歌を吟ぜられけるに、前栽のかたに、

北斗星前
唐の劉元叔の詩句。朗詠集に出てゐる

朗詠集
和漢朗詠集

尾崎雅嘉
大阪の國學者文政十年歿、七十三歳

北斗星前横旅雁　南樓月下擣寒衣

といふ唐詩を、まことにおもしろき聲して、高らかに詠ずるものあり。誰ばかりの人にてかくめでたき聲すらんと覺え、驚きて見やられたるに、そのたけ一丈あまりもあらんとおぼえて、髪のさかさまに生ひたるものにてありければ、いとおそろしく覺えて、心のうちに神佛を祈念せさせ給ひければ、このばけもの、「なにかは祟をなすべき。」とて、かき消ちて失せぬ。「さだかにいかなる姿とは見おぼえざりき。」と、經信卿後にかたられしが、朱雀門の鬼などにやありけん。かの鬼はすきものにて、かやうの事もをり〳〵ありけりとぞ。

この詩歌、ともに公任卿の朗詠集に入れられたれば、その歌を吟ぜられしに感じて、その詩を誦じ出でたるなるべし。

（尾崎雅嘉――百人一首一夕話）

源博雅
醍醐天皇の孫克明親王の子世に博雅三位と稱す。音曲の名人

その時
村上天皇の時

蟬丸
和歌に巧に、琵琶を善くした。逢坂山の閑居で死んだ

敦實
宇多天皇第八の皇子

七　流泉啄木

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり、延喜の御子の兵部卿克明親王と申す人の子なり。萬の事やんごとなかりける中にも、管弦の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙にひきけり、笛をもえならず吹きけり。其の時に逢坂の關に、一人の盲、庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雜色にてなんありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道いみじかりける人なり。年頃琵琶を彈き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙にひく。

しかるあひだ、此の博雅この道をあながちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、かの琵琶を極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなればゆかずして、人を以て内々に蟬丸に言はせけるやう、「などおもひかけぬ處には住

世の中はの歌　新古今集にある

むぞ。京に來ても住めかし。」と。盲之をききて、その答をばせずして曰く、「世の中はとてもかくてもすごしてむ宮も藁屋もはてしなければ」と。使歸りてこの由を語りければ、博雅之を聞きて、いみじく心にくゝ覺えて、心に思ふやう、われあながちに此の道を好むによりて、必ず此の盲にあはんと思ふ心深し。それに盲命あらんこともはかり難し、又われも命を知らず。琵琶に流泉・啄木といふ曲あり。是は世に絶えぬべきことなり。唯この盲のみこそ之を知りたるなれ。かまへてこれが彈くを聞かんと思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を彈く事なかりければ、その後三年の間、夜毎に逢坂の盲が庵の邊に行きて、其の曲を今や彈く今や彈くと密かに立聞きけれども、更に彈かざりけるに、三年といふ八月十五日の夜、月少しうはぐもりて、風少し打吹きたりけるに、博雅、あはれ、今宵は興あり、逢坂の盲今夜こそ流泉・啄木は彈くらめと思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴らして、物哀れに思へるけしきなり。博雅之を極めて嬉しく思ひて聞くほどに、盲獨り心をやりて詠じて曰く、

逢坂の關のあらしのはげしきにしひてぞ居たる世をすごすとて

とて琵琶を鳴らしたるに、博雅之を聞きて、涙を流して、あはれと思ふこと限りなし。盲獨語に曰く、「あはれ、興ある夜かな。若し我にあらぬ數寄者や世にあらん。今夜心えたらん人、來よかし。物語せん。」といふを、博雅聞きて聲を出して、「王城にある博雅といふものこそこれに來たれ。」といひければ、盲の曰く、「かく申すは誰にかおはする。」と。博雅の曰く、「我はしか〳〵の人なり。あながちに此の道を好むによりて、この三年この庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に逢ふ。」と。盲之を聞きて喜ぶ。其の時に博雅も喜びながら庵の

逢坂のの歌　續古今集にある

故宮　敦實親王

源隆國　平安朝末期の人。正二位權大納言。世に宇治大納言といふ。承元元年薨。七十四歳

今昔物語は古今に亘つて支那印度日本の傳說を集めたもの

法皇　後白河法皇

文治二年

内に入りて、かたみに物語などして、博雅、流泉・啄木の手を聽かん。」といふ。盲、「故宮はかくなん彈き給ひし。」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返すがへす喜びて曉に歸りにけり。これを思ふに、もろ〳〵の道は只かくの如く好むべきなり。それに近代は實に然らず。さればこれあはれなる末代には、諸道には達者は少なきなり。げにこれあはれなる事なりかし。蟬丸賤しき者なりといへども、年ごろ宮の彈き給へる琵琶を聽きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりにければ、逢坂には居たるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始まれるなりとなん語り傳へたるとや。（源隆國――今昔物語）

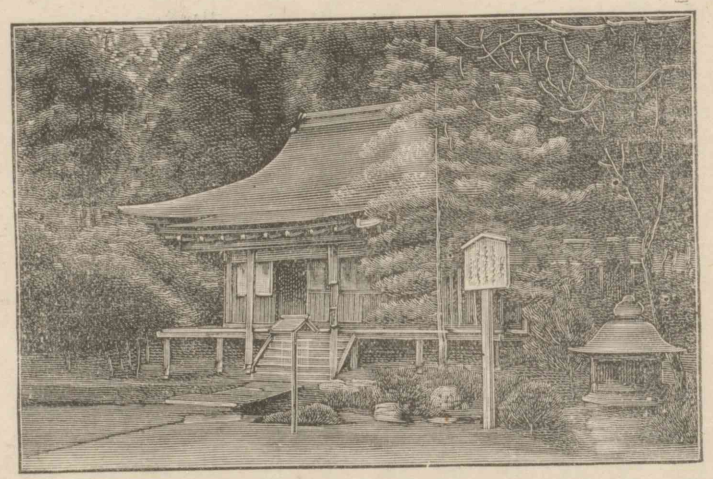
八　大原御幸　その一

法皇は文治二年の春のころ、建禮門院の大原の閑居の御すまひ、御

後鳥羽天皇の御時

建禮門院　高倉天皇の中宮、平清盛の女、安德天皇の御生母

大原　山城國愛宕郡大原村、舊大原莊



覽ぜまほしうおぼしめされけれども、二月・三月のほどは嵐はげしう餘寒もいまだつきせず、峯の白雪きえやらで、谷のつらゝもうちとけず。春すぎ夏きたつて北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。遠山にかゝる白雪は、散りにし花の形見なり、青葉にみゆる梢には、春の名殘ぞ惜しまるゝ。

ころは卯月廿日あまりのことなれば、夏草のしげみが中をわけ入らせたまふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたるかたもなく、

人跡絶えたる程も思召しやられて哀れなり。西の山の麓に一宇の御堂あり、則ち寂光院これなり。ふるうつくりなせる泉水・木立、よしある樣のところなり。「甍破れては霧不斷の香をたき、扉落ちては月常住の燈をかゝぐ。」とも、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲をみだりつゝ、池の浮草波に漾ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫にさける色、青葉まじりの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山時鳥の一こゑも、君の御幸を待顔なり。法皇これを叡覽ありて、かうぞあそばされける。

いけみづにみぎはの櫻散りしきて
なみのはなこそさかりなりけれ

ふりにける岩のたえまより、落來る水の音さへ、ゆゑよしある處なり。綠蘿の垣・翠黛の山、繪にかくとも筆も及び難し。女院の御庵

室を御覽ずれば、軒には蔦・朝顔這ひかゝり、しのぶまじりの忘草、「瓢簞屢むなし、草顏淵が巷にしげし、藜藿深くとざせり、雨原憲が樞をうるほす。」とも謂ひつべし。杉のふきめもまばらにて、しぐれも霜も置く露も、もる月影にあらそひて、たまるべしとも見えざりけり。うしろは山、前は野邊、いさゝ小篠に風そよぎ、よに立たぬ身のならひとて、浮きふししげき竹柱、都のかたの言傳は、間遠に結へるませがきや、纔かに事問ふものとては、峯に木づたふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらの音信ならでは、正木の葛・青つづら、くる人まれなる所なり。

瓢簞云々　和漢朗詠集にある句

法皇「人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。やゝありて老衰へたる尼一人參りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「此の山の上へ、花つみにいらせ給ひて候。」と申す。「さこそ世をいとふ御ならひといひながら、さやうのことに

仕へ奉るべき人もなきにや。御いたはしうこそ。」と仰せければ、此の尼申しけるは、「五戒・十善の御果報盡きさせ給ふによりて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜しませ候べき。因果經には『欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因。』と說かれたり。過去・未來の因果をかねて悟らせ給ひなば、つや〳〵御歎あるべからず。昔悉達太子は十九にて伽耶城を出で、檀特山の麓にて、木の葉をつらねて膚をかくし、山に上つて薪を採り、谷に下つて水を掬び、難行苦行の功によつて、終に成道正覺し給ひき。」とぞ申しける。

因果經　宋の求那跋陀の譯、因果應報の理を說いたもの

悉達太子　釋迦が太子であつた時の名

伽耶城　印度摩揭陀國に在る佛成道の靈地。釋迦の誕生の地は迦毘羅城である

檀特山　西北印度、健陀羅にある

九　大原御幸その二

此の尼の有樣を御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬものをむすびあつめてぞ着たりける。あの有樣にても、かやうの事申す不思議さよと思しめして、「抑〻汝はいかなる者ぞ。」と仰せければ、此の尼さめ〴〵と泣きて、しばしは御返事にも及ばず。やゝあつて涙を押へて、「申すにつけて、憚おほく候へども、故少納言入道信西が女、阿波の內侍と申す者にて候なり。母は紀伊の二位。さしも御いとほしみ深うこそさふらひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけて、身の衰へぬる程思ひしられて、今更せんかたなうこそ候へ。」とて、袖を顏に押當て、忍びあへぬ樣、目も當てられず。法皇、「されば汝は阿波の內侍にこそあれ。今さら御覽じわすれける。只夢とのみこそおぼしめせ。」とて、御涙せきあへさせ給はず。供奉の人々も「不思議の尼かなと思ひたれば、理りにて申しけり。」とぞ各〻感じあはれける。彼方此方を叡覽あれば、千草の露重く籬にたふれかゝりつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立つ澤も見えわかず。御庵室にいらせたまひて、障子を引きあけて御覽ずれば、一間には

善導和尚　支那隋の高僧
先帝　安德天皇
八軸の妙文　法華經。八卷ある
九帖の御書　善導和尚の書いた觀經疏といふ本の事であらう、九卷ある
淨名居士　印度の佛道修行者。維摩居士ともいふ
大江定基　圓通大師と號す。一條天皇の時、唐に渡つて、かの地で死んだ
清涼山　支那山西省

來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左には普賢のゐざう、右には善導和尚幷に先帝の御影を掛けられたり。八軸の妙文、九帖の御書もおかれたり。蘭麝の匂に引替へて、香の烟ぞ立ちのぼる。かの淨名居士の、方丈の室の中には、三萬二千の床をならべ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。障子には、諸經の要文ども色紙にかいて、所々に押されたり。その中に、大江定基法師が清涼山にて詠じたりけん、「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。」とも書かれたり。すこしひきのけて、女院の御製とおぼしくて、

思ひきや深山の奥にすまひして
雲井の月をよそに見むとは

さて傍を御覽ずれば、御寢所と覺しくて、竹の御竿に、麻の御衣・紙の御衾などかけられたり。さしも本朝・漢土のたへなるたぐひ數をつくし、綾羅・綿繡のよそほひも、さながら夢にぞ成りにける。法皇御涙を流させたまへば、供奉の人々もまのあたり見參らせし事どもなれば、今のやうにおぼえて皆袖をぞぬらされける。

建禮門院

さる程に上の山より、濃き墨染の衣着たる尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝ、下り煩はせ給ひけり。法皇叡覽あつて、「あれは如何なる者ぞ。」と仰せければ、老尼涙をおさへて申しけるは、「花がたみ肘にかけ、いはつゝじ折添へて持たせ給ひたるは、女院にてわたらせ給ひ候なり。爪木にわらび折りぐして候は、鳥飼中納言維實の女、五條大納言國綱卿の養子、先帝の御乳母、大納言佐の局。と、

平家物語　十二卷。平家一門の興亡を叙した軍記物語。著者不詳

日野山　山城國宇治郡醍醐の南に在る

落日　色々の雲のはたてをかざりにて入日や彌陀の光なるらむ

申しもあへず泣きけり。法皇御涙を流させ給へば供奉の公卿・殿上人も皆袖をぞ霑されける。女院は、「世を厭ふ御習といひながら、今かゝる御有樣を見えまゐらせんずらん恥かしさよ、きえも失せばや。」と思しめせどもかひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、掬ぶ袂もしをるゝに曉起きの袖の上、山路の露も繁くして、絞りや兼ねさせ給ひけん、山へも歸らせ給はず、御庵室へもいらせおはしまさず、あきれて立たせまし〳〵たる所に、內侍の尼參りつゝ、花がたみをば賜はりけり。

（平家物語）

一〇　日野山の閑居

今、日野山の奥に跡を隱して、南に假の日がくしをさし出だして、竹の簀の子を敷き、其の西に閼伽棚を造り、中には西の垣に添へて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日をうけて眉間の光とす。かの帳の

普賢　文殊と共に釋迦佛に侍して佛法を輔ける菩薩

不動　五大明王の一、其の中央に居る、大日如來の化身

往生要集　六卷。叡山横川の楞嚴院惠心僧都の作

扉に、普賢並に不動の像を懸けたり。北の障子の上にちひさき棚をかまへて、黑き皮籠三四合を置く、すなはち和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏・琵琶おの〳〵一張をたつ、いはゆる折箏つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕の方に炭櫃あり、之を柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地をしめ、あばらなる姫垣を圍ひて園とす、すなはちもろ〳〵の藥草を植ゑたり。假の庵の有樣かくの如し。

其の處のさまをいはば、南に筧あり、岩を疊みて水をためたり。林軒近ければ、爪木を拾ふにともしからず、名を外山と云ふ。谷しげけれど西は晴れたり、觀念の便なきにしもあらず。春は藤波を見る、紫雲の如くして西のかたに匂ふ。夏は時鳥を聞く、語らふごとに死出の山路をちぎる。秋は蜩の聲耳に充てり、空蟬の世を悲し

跡の白波　世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎ行く船のあとの白波（拾遺集）

岡の屋　山城國宇治郡宇治村大字五個莊の宇治川に臨んだ所

滿沙彌　滿誓沙彌の略　文武・元正朝頃の人

むかときこゆ。冬は雪を憐れむ、積り消ゆるさま罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休みみづから怠るに、妨ぐる人もなく、又恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らむ。もし跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし楓の風葉を鳴ら

鴨長明

潯陽江　支那江西省九江府德化縣に在る

源都督　桂大納言源經信

秋風の樂　盤涉調の曲名

流泉の曲　一名菩提樂

す夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督のながれをならふ。もし餘りの興あれば、しば〳〵松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめむとにもあらず。獨り調べ獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

大かた此のところに住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今まで五とせを經たり。かりの庵もやゝふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、此の山に籠りゐて後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまたきこゆ。まして其の數ならぬたぐひ、つくして之を知るべからず。たび〳〵の炎上に、滅びたる家またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみのどけくして恐なし。程せばしと雖も、夜臥す床あり晝居る座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく

身を知るに由りてなり。みさごは荒磯にゐる、すなはち人を恐るるが故なり。われ亦かくの如し、身を知り世を知れゝば、願はずまじらはず、たゞしづかなるを望みとし、うれひなきを樂みとす。

すべて世の人の住家を造るならひ、必ずしも身の爲にはせず。或は妻子・眷屬の爲に造り、或は親昵・朋友の爲に造る、或は主君・師匠および財寶・馬牛の爲にさへこれを造る。われ今身の爲に結べり、人の爲に造らず。故いかんとなれば、今の世のならひ此の身のありさま、伴なふべき人もなく賴むべき奴もなし。たとひ廣く造れりとも、たれをか宿したれをか据ゑむ。

それ人の友たる者は、富めるを貴み、ねんごろなるを先とす。必ずしも情あるとすぐなるとをば愛せず。たゞ絲竹・花月を友とせむには如かず。人の奴たる者は、賞罰の甚だしきを顧み恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、安くしづかなるをば願はず。たゞ我が身を奴とするに如かず。若し爲すべきことあらば、すなはちおのづから身をつかふ、たゆからずしもあらねど、人を從へ人を顧みるよりは安し。もしありくべきことあらば、みづから歩む、苦しといへど、馬鞍・牛馬と心を惱ますには似ず。今一身を分ちてふたつの用をなす、手の奴、足の乘物よく我が心にかなへり。心また身の苦みを知れゝば、苦しむ時はやすめつ、まめなる時はつかふ。つかふとてもたびたびすぐさず、ものうしとても心を動かすことなし。いかに況や常にありき常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらにやすみ居らむ。人を苦しめ人を惱ますはまた罪業なり、いかで他の力をかるべき。

衣食住のたぐひまた同じ。麻の衣・麻の衾、得るに隨ひて肌をかくし、野邊のつばな、峯の木の實、命をつなぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を恥づる悔もなし。かて乏しければ、おろそかなれど

三界　欲界・色界・無色界。又單に三千世界の稱

七珍　七寶に同じ。金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・玻璃・眞珠

鴨長明　後鳥羽上皇の時御歌所寄人となり、後出家して山林に生活した。建保年四歳。方丈六十三歳。記は長明が眼世觀を抒べたもの

も猶味を甘くす。すべてかやうのこと、樂しく富める人に對していふにはあらず、たゞ我が身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬・七珍も由なく宮殿・樓閣も望なし。今寂しきすまひ、一間の庵、みづから之を愛す。おのづから都に出でては、乞食となることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ。もし人このいへることを疑はば、魚鳥の分野を見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざれば其のこゝろを知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざれば其のこゝろを知らず。閑居の氣味もまたかくのごとし。住まずして誰か悟らむ。

（鴨長明――方丈記）

一一　落花の雪

俊基　藤原種範の子。元弘の忠臣。元弘二年鎌倉で斬られた

先年　正中元年

七月十一日　元弘元年

交野　河内國北河内郡、櫻の名所。またや見ん交野の櫻のみ野の櫻狩花の雪ちる春の曙（新古今集、藤原俊成）

紅葉の錦　朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき（拾遺集、藤原公任）

關の清水に　逢坂の關の清水に袖ぬれて今やひくらむ望月の駒（拾遺集）

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれしのち、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかど、樣々に陳じ申されし趣、げにもとて赦免せられたりけるが、また今度の白狀どもに、專ら陰謀の企、かの朝臣にあり。」と載せたりければ、七月十一日にまた六波羅へ召捕はれて、關東へおくられ給ふ。再犯赦さゞるは法令の定むる所なれば何と陳ずとも許されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に蹈みまよふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦着てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも、旅寢となれば物うきに、恩愛のちぎり淺からぬ、我がふるさとの妻子をば、行くへも知らず思ひおき、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今をかぎりとかへりみて、思はぬ旅にいでたまふ、心の中ぞあはれなる。

憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、

鹽ならぬ海
琵琶湖のこと

駒もとゞろに
貢物たえずそなふる東路の勢多の長橋音もとゞろに（風雅集）

うねの野に
近江より朝たちくれば、うねの野にたづぞなくなるあけぬこの夜は（古今集）

時雨も
白露も時雨もいたくもり山は下葉殘らず色つきにけり（古今集）

不破の關屋
人住まぬ不破の關屋の荒れたるは板ひさしの後は只秋の風（新古今集）

沖を遙かに見わたせば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟のうきしづみ、駒もとゞろと蹈みならす、勢多の長橋うちわたり、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかとあはれなり。時雨もいたくもり山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、笹わくる道をすぎ行けば鏡の山はありとても、涙にくもりて見えわかず。物を思へば夜のまにも、老曾の森の下草に、駒をとゞめて顧る、故郷を雲や隔つらん。

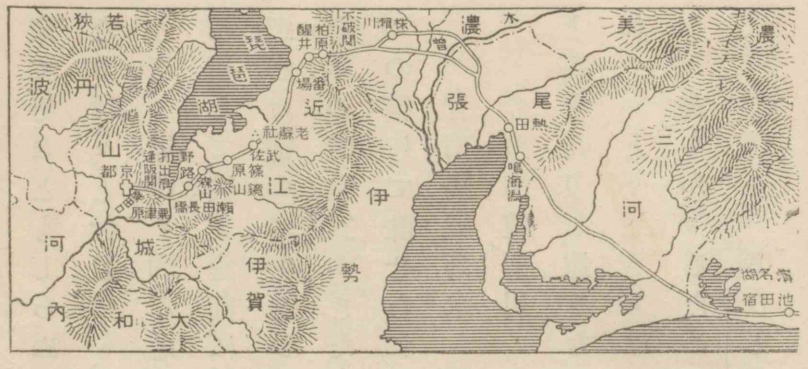
番場・醒が井・柏原、不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋の月、いつかわが身のを

しほひに今や云々
さよ千鳥聲こそ近くなるみ潟傾く月に汐やみつらん（新古今集）

うちわたす今か汐干になるみ潟とをよる舟の聲は通はず（夫木集）

元暦元年
後鳥羽天皇の御時

重衡
平清盛の子。元暦元年一の谷の戰に源義經に捕へられた



はりなる、熱田の八つるぎ伏拜み、しほひにいまや鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくととほたふみ、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれとゆふぐれの、入相なれば今はとて、池田の宿につき給ふ。

元暦元年のころかとよ、重衡の中將の、東夷のために捕はれて、この宿にやどり給ひし、そのいにしへのあはれまでも、思ひ殘さぬ涙なり。旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越え行けば、白雲道をうづみ

命なりけり　年たけて又こゆべしと思ひき命なりけり小夜の中山（新古今集）

菊川　天龍川の東岸にある。昔は西岸にあつた

承久の合戰　仲恭天皇承久三年

宗行　中御門中納言藤原氏

來て、そこともしらぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔、西行法師が、「命なりけり。」と詠じつゝ、再び越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける。　隙ゆく駒の足早み、日すでに亭午に上れば、かれいひ進らする程とて、輿を庭前にかき止む。　ながえをたゝきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣かきたりし咎によりて、宗行卿關東へ召下されしがこの宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水　汲下流而延齢
今東海道菊川　宿西岸而終命

と書きたりし、遠きむかしの筆の跡、いまはわが身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ、書かれける。

古もかゝるためしをきくがはの
おなじながれに身をやゝ沈めん

亀山殿　山城國葛野郡嵯峨野。今の天龍寺。

業平　在原氏。平城天皇の子阿保親王の第五子。右近衛中將たるを以て世に在五中將と云ふ。和歌の名人

夢にも　駿河なるうつつの山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり（伊勢物語）

波の關守　駒とめて過ぎぞやられぬ清見潟ちりしく花や波の關守（風雅集）

上なき思ひ　富士の根の烟はなほも立ちのぼる上なきものはおもひなりけり（新古今集）

こゆるぎの　こゆるぎのい

大井川をすぎ給へば、都にありし名を聞きて亀山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭・鷁首の舟に乗り、詩歌・管絃の宴に侍りしことも、今は二たび見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。　島田・藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れて、ものの悲しき夕暮に、宇都の山べを越えゆけば、蔦・楓いと茂りて道もなし。　昔業平中將の、すみかを求むとて、東の方へ下るとて、「夢にも人にあはぬなりけり。」とよみたりしもかくやと思ひ知られたり。　清見がたを過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守にいとゞ涙を催され、むかひはいづこみほが崎、興津・蒲原打過ぎて、ふじの高根を見たまへば、雪の中より立つ煙上なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、汐干や淺き舟みえて、おりたつ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道ゆき惱む、足柄山の峠より、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば、

七月廿六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。　（太平記）

そたちならし　磯菜つむめざしぬらすな沖に居れ波（古今集）

太平記　後醍醐天皇御一生間の戰亂を叙したる軍記物語。著者不詳

一二　隱岐の小島

出雲國安來の津といふ處より、御船にたてまつる。大船二十四艘小舟どもは數も知らずつゞきたり。遙かにおし出だすほど、今一かすみ心細うあはれにて、誠に「二千里の外」の心地するも、今さらめきたり。

安來　能義郡

二千里の外　三五夜中新月色、二千里外故人心（白氏文集）

かの島におはしましつきぬ。昔の御跡はそれとばかりのしるしだになく、人のすみかも稀に、おのづから蜑の鹽燒く里ばかり遙かにて、いと哀れなるを御覽ずるにも、御身の上はさしおかれて、まづかの古のこと思し出づ。かゝる處に世をつくし給ひけむ御心のうち、いかばかりなりけむと、哀れに辱く思さるゝにも、今はた更にかくさすらへぬるも、何により思ひ立ちし事ぞ。かの御心の末や

かの島　隱岐の島

昔の御跡　後鳥羽院の御遺跡をいふ

國分寺　知夫郡

果し遂ぐると思ひしゆゑなり。苔の下にもあはれとおぼさるらむかしと、よろづにかき集めつきせずなむ。海づらよりは少し入りたる國分寺といふ寺を、よろしきさまにとり拂ひて、おはしましし所に定む。今はさはかくてあるべき御身ぞかしとおぼししづまるほど、猶夢の心地していはむ方なし。そこら參りし兵どももまかづれば、かいしめりのどやかになりぬる、いとゞ心細し。昔こそ受領どもも、任のほどその國をしたゝめ行ひしか、この頃は只名ばかりにて、いづくにも守護といふものの、目代よりはおぞましきをすゑたれば、武家のなびきにてのみ、おほやけざまの事は、よろづおろそかにぞしける。

中務の御子も土佐におはしましつきて、御送りの武士にたまはせける。

思ひきやうらめしかりし武士の

名残を今日は慕ふべしとは
かやうのたぐひあまた聞えしかど、何かはさのみ、皆人もゆかしからず思さるらむとてなむ。
誠や、中宮はそのまゝに御ぐしもたぐる時もなく沈み給へる御有様いと理に、遠き御別の悲しさにうちそへて、御胸の安きまもなく思しこがる。年月は御身の人わらへなる様にて、天の下の騒がれたりしをこそ思し歎き、御門も苦しきことに思し宣はせけるに、今はなか〳〵その筋のことはかけても思さず、様々なりし御修法の壇どももあとかたなく毀ち果てて、かきさましぬ。只管にたゞかかる世のうさをのみ思し惑ふに、日頃ふれど、御湯なども絶えて御覽じ入れねば、そこはかとなくいとゞそこなはれまさりて、ながらふべくも見え給はず。隱岐よりはたまさかの御消息などの通ふばかりにて、覺束なくいぶせき事多く積りゆくも、いつをあふ瀬の

八つになり給ふ
恒良親王
北山
西園寺家は北山にあつた

限ともなく、定めなき世に、やがてかくてやとぢむとすらむと、かたみにいみじうおぼさる。
かしこにまゐり給へる内侍の三位の御腹にも、御子たちあまたおはします。いづれもいまだいはけなき御程にあれど、物思し知りて、いみじう戀ひ聞え給ひつゝ、をり〳〵は忍びてうち泣きなどし給ふ。幼うものし給へば、遠き國までは遷し奉らねど、もとの御後見をばあらためて、西園寺大納言公宗の家にぞ渡し奉る。八つになり給ふぞ御このかみならむかし。北山におはするほど、夕暮の空いと心すごう、山風あらゝかに吹きて、常よりも物悲しく思されければ、

つく〳〵と眺めくらして入相の
鐘のおとにも君ぞこひしき

幼き御心にも、はかなく打ちひそみたまへる、いとあはれなり。こ

増鏡　後鳥羽天皇から後醍醐天皇までの事を叙した假名文の歴史。著者不詳

こもかしこも盡きせず思し歎くさま、いはずとも皆推し量るべし。

（増鏡）

一三　父母のをしへ

一　娘の嫁する時訓誡の文

夫を天と致し候事は、誰も辨へ居る事に候。天を怨み天を厭ひ候とて、逃れ可申様無之候。是等の義に、心を附け、能々相事へ可申候。凡そ門内の治は、恩義を掩ひ候故、心易立も出來し候間、敬愼專一に心掛可申候。

一、男は、剛を以て徳と致し、女は柔を以て道と致し候事に候間、身を修め候には、敬に如くはなく、強きを避け候には、順に如くはなき事に候。故に敬順の道は、婦人の大禮に候。さて誰も最初嫁入候節は、何様にも厚く心掛くべきつもりの處、追々居馴

候に隨ひ、前にも申候心易立と云ふ者出來候間、朝夕に心を用ひ、聊かにても差出がましき事、或は不足がましき事共、決して有之間敷く候。總じて足る事を知り、勘忍を專一とし、言行ともすべてひかへめ〳〵に致し可申、凡そ事に直なると曲れるとはあるなれど、それを其の儘に、是は直なり、是は曲れるなりなどと申す時は、自然に聲高になり、果は夫婦爭ひにも至り申候。畢竟は平日前條の次第を等閑にして心に掛けざるより の事に候。柔順婉曲にして夫に從ふは女の道と申す事を心得可申候。

一、僅なる功に誇り候は、教なき婦人の常にて、其の心の底も見られ、恥づかしき事に候。よき取計の儀有之候とも自負の體なく、或は不行屆不調法などと被申候節は我が身を顧み、聊か不平に存じ申間敷く候。それを口數多く、彼是辨じ候へば、非を

飾り候にあたり、却て他の厭惡を來し候事に至り可申候。

右は此の度緣付き候に付ては、最初よりの心得方大切に候間、差遣はすものなり。

一、下婢共告口等一切用ひ申間敷く、己の長を說き、人の惡しき事をあげ候樣なる物語は決して致し申間敷く候。

一、其の家政の儀、他家並に里方の振合を例に引き、彼是申間敷く且自分の申出候通にならざるとて、不快の顏付、又はぷり〳〵致候事共、甚だしく夫の氣色に障り候ものに付、都ての事に此の心付肝要と心得可申候。　且は夫に對し候て、一旦さからひ候とも、終には致し方なく、先の意に從ひ候者故、寧ろ最初より從順に致し候方、女の道にもかなひ、われにも由なき恚恨の念慮を起さず、兩全の道と心得可申候。

（江川英龍）

江川英龍　通稱太郎左衞門、號は坦庵。幕末の先覺者安政二年歿、五十五歳

二　六諭衍義をすゝむる文

小學　支那南宋の大儒朱熹の著。學童に敎へる爲に撰んだ儒書

荻生先生　名は双松字は茂卿、徂徠と號す。德川時代の儒者。享保十三年歿、六十三歳

人に五倫あり、そは主從・親子・夫婦・兄弟・朋友の五つに候。　主人は家來に、禮義を亂さず、憐みを垂れ、家來は主君に忠義を盡して私無く、親は子を慈しみ敎へ、子は親を尊びて孝行し、夫は柔和に妻を導き、妻は夫に貞節を盡し、兄は弟を友とし、愛しみ、弟は兄を敬ひ悌がひ、朋友は互に信實を盡す、これを人の道と云ふ。　倭國・唐土のあまたの書籍、古のひじり、賢き人の說きをしへられしところ、皆此の道にこそ候へ。　殊には小學といふ書に委し。　國あれば人あり、人あれば敎育あるならひ、唐土の賢き王、六つに論じ人倫の道を敎へられしを、後の國の大臣、なほ其の言を說き演べて、六諭衍義と題し、荻生先生點本、近來專ら行はれ候。　講談をうけたまはり候ところ、俗の耳に入り易く、しかも古のひじりの敎へたまふ意を離れず、能くも諭されたるものなれば、婦女は內を治むる者ゆゑ、常にうけたまはりて、家道に益あるべきこと少からず覺え候まゝ、一筆御すゝめ申

馬場存義　江戸の俳人。天明二年歿、八十二歳

しまゐらせ候。かしく。

（馬場存義）

一四　我が家の晩餐時

私の家の夕食時は割合に賑やかなものです。十三を頭に七人の子供が、その賑やかさをつくるのです。引伸し食卓の廻りに、大人や子供の倚子が一ダースばかり並んで、それが太い聲や細い聲の持主を各に載せると、色々の話がひつきり無しに湧きます。大きい子供は學校の出來事や、先生から聞いたことなどを話し、小さい者はまた小さい遊び友だちのことを話したりしてゐます。子供らしい質問や、大人ぶつた批評が、「水を下さい」とか、「も少し御飯を」とかいふ要求の聲とまじつて、後から後からとつゞいて出ます。大人が話をする時も、子供等はその理解し得るだけを聽かうとして熱心に耳を傾け、時々子供の知慧で能ふかぎりの力を盡して、大人の話に關聯した子供の話を以て應じます。

子供が話をする時は、何時も大人の方が自分の言葉を引込めて、子供の言葉を一々耳に入れ、能ふだけの力でそれに返事するやうに心掛けて居ます。子供が物を言はうとするには、相當に努力して決心してから發言するのです。彼等は一所懸命で口を開くのです。だから大人は自分等の話をやめて、子供の言葉に耳を傾けなければなりません。それは、子供等のためでなく、私どもは、自分等の興味を得るため、益を得るためです。

眞面目に子供の言葉を聞き、興味を以てそれに應へることは、子供等のために最もよい言葉の藝術の教育ではありませんか。大人の返答が、自分等の幼稚な言葉よりも善いと認めたなら、子供等は專心それを覺えようとします。しかも子供等は自由に、自分の善いと感じたもののみを摘み上げて、取入れるやうです。大人の最

善をつくした應答の言葉は、大人が氣付かぬ中に、もう子供を教育して居るのです。幼い者を心から尊敬して、彼等の思想を貴重なものとして、その言葉に耳を傾けるものならば、我々はどんなに啓發されるかわかりません。我々は凡俗に捉はれて、いつの間にか大人ぶつた心になつてしまつて居ます。そしてこの食卓の子供の言葉に、時々力ある啓發の芽を與へられます。

或晩は、食時の後にめい〳〵に一枚づつの紙が渡されます。木炭だの蠟筆だのを皆が持つて、卓子の上に置かれた靜物の寫生が始まります。小さい子は、ゆがんだ圓や、無茶苦茶の線を引きます。寫生をせずに、外のものばかり書いてゐる子もあります。大人のお客樣まで一しよに、不慣れの手附で木炭を紙の上に引きずります。「お父さん、これ。」といつて見せに來るものもあり、「このところが難しい。」と困るものがあり、しばらくは話聲が止まつて、退屈でない

靜けさになります。

出來た繪は、ピンで壁に揭げられ、直に展覽會が開かれます。批評は自由に交換され、豫期せぬ點を旨いと譽められたり、下手なところが笑聲で喝采されたりします。だれの繪でも同等に尊敬され大切に保存されねばなりません。かういふ繪の會は、偶然誰かの心に浮んだことが機緣で始まるのです。

子供が描いて捨てた繪は、特に巧く出來てゐるのがあります。子供は、それが大人の繪に似て居らぬから下手だと思つて捨てる事があります。その繪を拾つて、大切に壁にかけて置きなどすると、子供の心に自重の念が出るやうです。自重の念を持ち、自分の心に權威を持つて製作する藝術品には、子供のものといつても、犯すべからざる點が備つて居るではありませんか。

或晩には、私の樂燒に用ひる粘土を壺から出して、テーブル掛を取

去つたあとに新聞紙を敷いて置きます。その上で小さい壺を作ります。子供等は、「お父さん。私にも少し粘土を下さい。」といつて寄つて來ます。これは夕食の時ばかりではない、雨の日などに子供が遊びあきた時、「さあ、皆で粘土細工をしよう。」といふと、「はあはあ」といつて集つて來ます。彼等はいつも、何かしたいといふ心で、滿ちてゐるやうです。

小さい子は土を持つてお團子をこしらへるばかりです。大きい子等は私の時々やるのを見眞似に、粘土の紐を作つて、それを卷いて積上げた筒形を作つたり、壺の形にする方法を覺えて、花生や箱のやうな形としたり、人の頭や、犬などの形を作つたりします。土瓶の口や、蔓の形の上手な兒もあります。六つになる男の子は熱心な陶物師で、いつも蓋のついた楕圓形の器物を作るが、實に不思議な形に出來上ります。出來上るまでは他の者が何といつても

西村伊作
新思想家文化學院の建設者

相手にしません。だん〳〵に眠くなるし、思ふやうに出來上らぬ時は、小さい工藝美術家は泣出す時もあります。

出來たものは、棚に並べて、めい〳〵一つの仕事が終つたといふ顏付で、作品をながめては、手直しをして居ます。乾かして燒いて上藥をかけたものが出來上つた時に、子供等は自分の作品に對して敬意を拂つて居ます。私の家では、金で買つた骨董品の無い代りに、こんな子供の作品が家の寶となつて殘るでせう。

このやうに夕食と、その後の暫くの時間は、家庭の自由な教育のために用ひられます。夕食の時は、全家揃つて互に心を交へ得る悅が深いのです。

（西村伊作――藝術を生活として）

一五　一衰一盛

我が國の尊きは、畏き皇室の上に在ればなり。皇室盛りなる時は

皇極天皇　第三十五代
孝德天皇　第三十六代
安德天皇　第八十一代

國隨ひて盛りに、皇室衰ふる時は、國また衰ふ。皇室の盛衰はやがて國の盛衰なり。されば臣民たるものは、年のはじめにあたり、まづ皇室の隆盛を祈らざるべからざるなり。

つら〳〵我が數千年間の歴史を考ふるに、そのさま恰も四時の移り變るが如し。神武天皇より皇極天皇の御代まで、千三百年間は、世の中いとのどかに、花咲匂ふ春ともいふべからん。孝德天皇より安德天皇まで、五百四十年間は夏の如く、鎌倉幕府の世となりては、悲しきことのみ多く、秋のさまによく似たり。足利の末つ方より德川の終まで、雪・霜降りこほる冬の空に異ならず。春夏秋冬ゆきめぐるそのをり〳〵に、嬉しき事も憂き事も多かるは人の世の習ひ、またいかにともすべからざらん。

そも〳〵春はのどけき時なり。かの橿原の宮に天の下しろしめししは、春たつあしたの如く、それより霞もたなびき、鳥も鳴き花も

橿原　大和國高市郡

高き屋に登り給ひて云々　仁德天皇のこと。高き屋にのぼりて見れば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり（日本紀竟宴の歌）

若菜つむ子を云々　雄略天皇のこと。萬葉集開卷にある

狹穗の暴雨　垂仁天皇の時狹穗彦が叛した

蘇我の山風　蘇我の馬子・蝦夷・入鹿等が暴威を振つた事を云ふ

唐綾の衣　漢學

墨染の袖　佛教

藤かづら　藤原氏をさす

匂ひて、君臣の間いと睦まじく、和氣洋々として、眞に仙境の如くなりしなるべし。高き屋に登り給ひて、民のかまどの烟をみそなはししもこの御時なり。野邊近くいで給ひて、若葉つむ子を憐み給ひしもこの御時なり。あはれ狹穗の暴雨（サヤメ）なかりせば、あはれ、蘇我の山風なかりせば、いかにのどけかりけん。思へば花のためあだなるは、雨と風となるかな。

落合直文

春もいつしか暮れて、夏とはなりぬ。花の衣を脫捨てて、唐綾の衣・墨染の袖のいたくおひしげれるも、新樹の頃なればなるべし。藤かづら染の袖など形こそあらめ、心までそれになれりしはいかに。藤か

八幡の森　清麿のうけた宇佐八幡の神託

高雄の山　和氣清麿を祀つた護王神社山城葛野郡の高雄山に建つてゐる

佐渡の小島に　承久三年（一二二一）七月順德上皇佐渡に遷幸し給ふ

笠置の山　元弘元年（一三三一）九月後醍醐天皇笠置の行在を出で給ふ

足利兄弟　尊氏・直義

づらも、そのはじめ雲井高く匂ひしは、ふかきゆかりのあればこそあれ、おのが心に任せてのみ、はひひろごれりしはいかに。共に皇室の爲には、いとゞふさはしからぬ事どもなりき。殊におどろおどろしかりしは、五月雨ふり續きて、弓削の川水のあふれいでしなりけり。八幡の森のほとゝぎすの一聲なかりせば、高雄の山に照る月のかげしなかりせば、この世はつひにいかに、今も猶あやめわかれぬ五月闇にてをはりしならん。思へば膚さへいとさむし。

鎌倉山に風吹立ちしは、はや秋のしるしなめり。世の中何となく物悲しく、北條・足利の無情なる、野分の風にも譬へつべし。萩・尾花・女郎花・桔梗など咲亂れて、其の色もなし。佐渡の小島に流され給ひて、波の音に御夢をさまさせ給ひ、笠置の山を逃れ出で給ひて、松の雫に御袖をしぼらせ給ひしも、みなこのうき秋の御事どもなり。北條は運つきて滅びにたればよし、暴逆の足利兄弟の、天誅にあはざりしはいかにぞや。かれが爲に、皇子・皇孫の御心をなやまし給ひしはいかばかりぞ。それが爲に、忠臣・義士のたふれたりしはいくばくぞ。かの土のむろ屋のきりぎりす、阿蘇山かげの鹿の聲など、いふも更なり。

土のむろ屋　護良親王のこと

阿蘇山かげ　懐良親王のこと

宗良親王　後醍醐天皇の皇子

恒良親王　後醍醐天皇の第六皇子。建武元年皇太子となり、延元三年足利氏に毒殺せられ給ふ

宗良親王の、

君のため世のためなにかをしからむ
　すててかひあるいのちなりせば

また皇子恒良親王の、

つくづくとながめ暮していりあひの
　かねのおとにもきみぞこひしき

湊川の水泡　楠正成

越のみ雪　新田義貞

阿部野の露　北畠顯家

などゝうち言ひたまひし悲みなど、言はんは世の常なり。其の他湊川の水泡となりしもあれば、越のみ雪、阿部野の露と消えしもあり。また夜のまぎれに、行宮の櫻樹を削り、名和の港に御船の艫をおし

あるは伊勢の海に漂ひ、筑紫のはてに身を沈めたりしなど、指折るだに思にたへがたし。

准后親房の卿の、

さても舊都には、戊寅の年の冬、改元して曆應とぞいひける。芳野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひ思ひの年號なり云々。内侍所・神璽も芳野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。さても八月十日餘り六日にや、秋霧にをかされ給ひてかくれまし〳〵ぬとぞきこえし。ぬるがうちなる夢の世は、今にはじめぬ習とは知りながら、かず〳〵目の前なる心地して、老の涙もせきあへねば、筆のあとさへとゞこほりぬ。

とうち歎かせ給ひ、又太平記後村上天皇の條を繙くに、

吉野の主上は天の川のおく、賀名生といふ所に、僅かなる黑木の御所をつくりて御坐あり。女院・皇后は柴葺く庵のあやしきに、

行宮の櫻樹　兒島高德
名和の港　名利長年
伊勢の海に漂ひ云々　北畠顯信
筑紫のはて云々　菊池氏
親房　源姓。家を北畠又は中院といふ。南朝の忠臣。准三宮となり正平三年（一三四八）薨ず
八月十日　延元四年
ぬるがうちに　寢るが中に見るをのみやはかなき世をもうつゝとは見ず（古今集）
天の川　大和吉野郡丹生川谷の南

軒漏る雨を防ぎかね、御袖の涙ほすひもまなく、月卿・雲客は木の下岩かげに、松葉を葺きかけ苔のむしろをかたしきて、身をおく宿とし給へば、高峯の嵐ふき落ちて、夜の衣をかへせども、露の手枕さむければ、昔を見する夢もなし。

とあり。以上の二文を讀みて、泣かざるものやはある。もし泣かざらんには、その人は忠臣にあらざるなり、あらず、予は呼びて亂臣賊子といはんとするなり。

秋も暮れぬ、足利の末となりては、時雨の空の寒きのみならず、所々の戰鬪は木枯の風にもまさりてすさまじく、千軍萬馬の聲は木の葉ふきまく音よりも猶しげし。世はかゝる樣なれば、皇室の衰へさせ給へる、いふばかりなし。御宮も荒れ、築土もくづれ、御前のすだれも破れて、御座の御ともし火さへ、外面より見えたりきとや。

また御即位の御式など、行はせ給ふことのかなはせられざりしも

始めて取行ふはせ給ひ云々　永祿三年(一五六〇)正月正親町天皇卽位の禮を行ひ給ふ

たび〳〵にて、かの毛利元就の資を奉りしによりて、始めて取行はせ給ひしなど、あさましともあさまし。さはいへ織田・豐臣二公の、一すぢに皇室をしぬびまつりしなど、小春の空とやいはん。その後武藏野の風いと寒く、霜・霰・みぞれ雪など降らぬ日もなかりければ、冬の長夜をたゞにてあかし給ひし折もありしなるべし。高山正之の宮城を拜み其の衰微の樣を見まつりて、いたく泣きたりしもこのほどの事なり。

高山正之　通稱彦九郎。上野の人、慨家。寛政五年自殺、四十四歲

天慶の昔、平將門は宮城の壯觀なるを見て、謀反の心を起したりきと、將門の悖虐最も惡むべし。されどそを羨みまつりしは、皇室の爲には猶よろこぶべきなり。正之の精忠何にか譬へん。されどそを拜み奉りて、袖しぼりあへざりしは、皇室の爲には悲しむべきなり。

平將門　良將の第二子。天慶三年に誅せられた

予嘗て故贈太政大臣岩倉具視公の傳を讀みたり。そのうちに、ある日先帝御歌をよませ給ひて、「短册を。」と侍臣に仰せられけるに、そ

岩倉具視　堀川康親の子。岩倉具慶の養子。明治十六年薨。五十六歲

先帝　孝明天皇

の御料紙もあらざりしかば、公は悲みにたへず、わが直衣の袖をひきさきて奉られしよし誌せり。いかにうき世とはいへ、一天萬乘の御身をもて、かゝるいさゝけき御料紙をだに、御心にまかせられざりしなど、いかに口惜しくおぼしめしけん。

天運循環して、勤王の諸士四方に起り、幕府たふれ、皇室興り、一陽來復して、遂にめでたき明治の大御代とはなりぬ。萬開けに開け、榮えに榮え行く大御代とはなりぬ。憲法も布かせ給ひぬ。皇太子も定めさせ給ひぬ。御代の行末は雪凌ぐ千代田の宮の千代八千代も限りあらざるべし。かゝるめでたき皇國に生れたる我等は、至誠至忠にして聖德に對へまつらでやは、皇室につかへまつらでやは。書きをへて空見いだせば、朝日の影いとうらゝかに、軒端の梅ももやゝほころびそめたり。

（落合直文）

落合直文　號は萩の屋。國文學者。明治三十六年歿　四十二歲

十四日
元祿二年六月
やどり
沼津の旅館

時しらぬ云々
時しらぬ山は富士の嶺いつとてかかのこまだらに雪のふるらむ（伊勢物語）

みな月のもち云々

一六　田子の浦曲

十四日、朝がたにやどりを出づ。家々旅人の朝たつけしきしるく、女どもの立出で送るなど見ゆ。馬どものいばえわたしたるに、殘りの夢もさめぬ。浮島が原に出でて、

不二の嶺は夏なき山か吹きおろす
あさかぜさむしうきしまが原

江戸を出でてより、日ごとに見やらるゝ富士の高嶺の、うすみどりにてたぐひなき山の姿の、遙かに雲を出でたるが、我が行く方に相向へる、心はかしこにのみあくがれつゝ、今日はいとど近づきもて行くまゝに、はれ〴〵しく目をそらになして、「時しらぬ」と昔の人の詠めけん雪さへ今も見ゆれば、其の世のふるごともいとゆかし。

いづくよりふる白雪のつもりけむ
雲もおよばぬ富士のたかねに

富士の嶺に降りおける雪はみな月の望に消ぬればその夜降りけり（萬葉集）

足高の山
愛鷹山

降りかふるほどや來るらむみな月の
もちにもちかしふじのしらゆき

仰見士峯高倚天　雲端玉立德容鮮
千秋雪色映東海　一抹烟光讓淺間
神秀豈爭他列嶽　仙蹤猶在我危巔
鄕人若問途中事　好把此山比聖賢

高嶺よりこなたに横たはれるは、足高の山といふ。かく名高くはればれしきあたりに、いかではひよりけんとをかし。富士の山神蹴くづし給ひたりとか、かたはになりては立てるかひなくこそ。けふは日照りていと暑し。峰のごとくなる雲遠く見ゆめれど、かげろふべくもなし。

やくがごと苦しかりけり六月の
照る日をさへよ夕立の雲

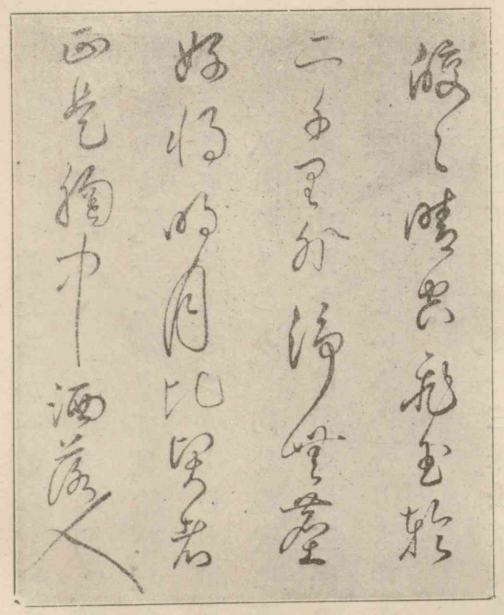
せき
足柄の關

足柄山に雲のかゝれるも見ゆ。
　よそにして過行くせきの跡なれや
　　雲のみこゆるあしがらの山
富士川舟にて渡る。水いと早くしてあやふげなり。
　富士川のみなぎる浪は時しらぬ
　　高嶺の雪や今もとくらむ
其の後また少し小さき川を渡る。是を問へば、うる井川といふ。蒲原・由井をすぎて、薩埵山をこゆ。中比まで、此のあたりこよなう險しく、かたつ方は壁のごとく立ちたる山の、かたつ方は海にて、唯細き道一つなれば、人も馬も僅かにひとりびとりならでは通り難し。「親しらず子しらず」とかいひて、親子といへど、相顧みることあたはざりしといふ。然るを近き世に、此の山をかく開き平げさせ給ひて、萬の人のゆきかひたやすくなれば、道廣き御惠みなりかし。

筆蹟
皎々晴空飛玉輪、二千里外淨無塵、好將明月比賢者、正是胸中洒落人

沖津
興津
みし人のみし人のおもかげとめよ清見潟袖にせきある波の通路
（新古今集）

田子の浦にしほたるゝあまの家ども、まばらにあやしげなる戸口より立出でて、磯邊にながめ居たる、汐汲まんとにやと見るに、さもせず、貝拾ふにこそ。げにさまぐいとまなきしわざもあはれなり。沖津に到り、清見潟を過ぎて、こゝは昔の人の心とゞめし、から歌・やまと言の葉のすぐれたる多ければ、なかく拙き言の葉の見苦しからんをば、打寄する沖津波もすゝぎがたくやと引きこめて、たゞ、みし人の面影とめよ。」と、獨言して過ぎ侍るまゝ、心のうちに



井上通女筆蹟

いのちあればけふ又こゝにきよみ潟
　浪たちかへるみぎはをも見つ

とぞふと思はるゝ。清見寺の門の前におろしたてて、暫しいこふ。益本よりきて、「寺に入りて見給ひなんや、いとよき景色なり。」など聞ゆれど、登ることもむづかしければ、此のすだれごしに、わづかに門より見入れ侍るのみ。向ひの家に膏藥賣る所多し。

益本　同伴せる通女の弟

これより尙山路をわけ行くに、三保の松原はるかに見ゆ。天つ少女の、羽衣かけしといふあたりもゆかしく、げにや天人もかけりつべき所のさまなり。

山行直下海邊好、三保松原與浪連。
仙女羽衣空去後、斜陽掛處憶蹁躚。
うどはまの疎くは人にみえじとや
　たつ白浪のまなくよすらむ

井上通　讃岐の人。京極備中守の家臣井上儀左衛門の女。漢學に通じ和歌に巧であつた

シテ　天人
ワキ　白龍
ツレ　漁夫
季　三月

風早の云々　風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の浦人さわぐ波立つらしも（萬葉集七）

萬里の好山云々　千里好山雲乍歛、一樓明月雨初晴（詩人玉屑）

心そらなる云々　いかならばきよとかは思ふ見るからに心空なる天の羽衣（人續後拾遺集）

伊原川とかいひて、小さき川を渡る。江尻にいたりて宿をかる。

（井上通――歸家日記）

一七　羽衣

ワキ　ツレ　謠「風早の三保のうらわをこぐ船の、浦人さわぐ浪路かな。

ワキ「これは三保の松原に、はくれうと申す漁夫にて候。

ワキ「萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨初めて晴れたり。げにのどかなる時しもや、春の景色、松原の浪立ちつゞく朝霞、月も殘の天の原、およびなき身のながめにも、心そらなる景色かな。歌「忘れめや、山路をわけて清見潟、はるかに三保の松原にたちつれいざやかよはん。「風向ふ雲のうき浪たつと見て、釣せで人や歸るらん。待てしばし、春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな。

忘れめや云々　忘れずよ清見が關の波間より霞みて見えし三保の松原（續古今集）

風向ふ云々　風向ふ雲の浮浪たつと見て釣せぬさきに歸る船人（藤原爲相）

ワキ詞われ三保の松原にあがり、浦の景色を眺むる所に、虛空に花ふり音樂きこえ靈香四方に薫ず。これたゞ事と思はぬところに、これなる松に美しき衣かゝれり。寄りて見れば色香たへにして常の衣にあらず。いかさま取りてかへり、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞「なう、其のころもはこなたのにて候。なにしにめされ候ぞ。

ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候程に、取りて歸り候よ。

シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず。本の如くにおき給へ。

ワキ詞「そも、此の衣の御ぬしとは、さては天人にてましますかや。さもあらば末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。

シテ詞「悲しやな、羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に還らんことも協ふまじ。さりとては返したび給へ。

ワキ謠「此の御詞を聞くよりも、いよ〳〵はく

天人の五衰　一、頭上花萎　二、天衣垢塵所着　三、腋下汗出　四、不樂二本居一　五、浴日數晌

天の原の歌　丹後風土記に出てゐる

れう力を得、本より此の身は心なきあまの羽衣とりかくし、かなふまじとて立ちのけば。

シテ「今はさながら天人も、羽根なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。

シテ「地にまた住めば下界なり。

シテ「とやあらん、かくやあらんと悲しめど。

ワキ「はくれう衣をかへさねば、

シテ「力及ばず。

ワキ「せんかたも、

地「涙の露の玉鬘、かざしの花もしを〳〵と。天人の五衰も、目の前に見えて淺ましや。

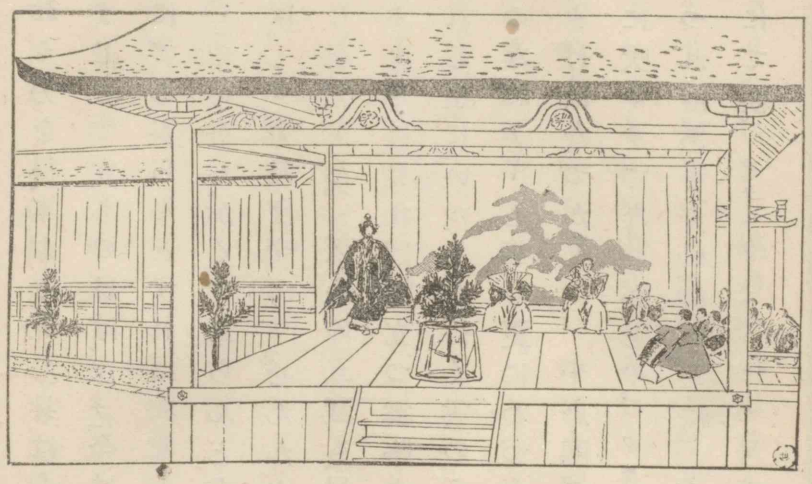
シテ「天の原ふりさけ見れば、霞立つ雲路まどひて、ゆくへしらずも。

地「住みなれし空に、いつしか行く雲の、うらやましきけしきかな。迦陵頻伽のなれ〳〵し聲、今更にわづかなるかりがねのかへり行く、天路をきけばなつかしや。千鳥・鷗の沖つ浪、行くかかへるか春風の、そらに吹くまでなつかしや。

ワキ詞「いかにまうし候。御姿を見たてまつればあまりに御いたはしく候ほどに、衣をかへしまうさうするにて候。

シテ「あら、うれしや。こなたへたまはり候へ。

ワキ詞「しば



らく。承りおよびたる天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏したまはば、衣をかへし申すべし。

謠　シテ詞「うれしや。さては天上にかへらん事を得たり。此のよろこびに、とてもさらば、人間の御遊の羽衣かたみの舞、月宮をめぐらす舞曲のあり。たゞ今こゝにて奏しつゝ舞臺世の憂き人に傳ふべし。さりながら衣なくては協ふまじ。さりとては先づ返し給へ。ワキ詞「いや、此の衣を返しなば、舞曲をなさで其のまゝに、天にやあがり給ふべ

春霞云々
春霞棚引きにけり久堅の月の桂も花やさくらん（後撰集）

天津風云々
天津風雲の通路吹きとぢよ少女の姿しばしとどめむ（古今集）

き。シテ詞「いや、疑は人間にあり。天に僞なきものを。ワキ「あら、はづかしや。さらばとて羽衣をかへし與ふれば、シテ「少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ「天の羽衣風に和し、ワキ「雨にうるほふ花の袖、ワキ「一曲をかなで、シテ「舞ふとかや。地「東遊の駿河舞此の時や始なるらん。地「それ久堅のあめといつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、久堅の空とは名付けたり。シテ「然るに月宮殿の有樣、玉斧の修理とこしなへにして、地「白衣・黑衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ「われも數ある天少女、月の桂の身をわけて、かりに東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ「春霞棚引きにけり、久堅の月の桂も花や咲く。げに、花かづら色めくは、春のしるしかや。面白や天ならで、こゝも妙なり天津風、雲の通ひ路吹きとぢよ、少女の姿しばしとゞまりて、此の松原の春の色を三保が

君が代は
君が代は天の羽衣まれにきてなづともつきぬ巖なるらむ（拾遺集）

崎、月清見潟富士の雪、何れや春の曙、たぐひ浪も松風も、のどかなる浦の有樣。そのうへ天地は何を隔てん、玉垣の內外の神の御裔にて、月も曇らぬ日の本や。シテ「君が代は天の羽衣まれにきて、地「撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌、聲そろへてかず〳〵の笙・笛・琴・箜篌孤雲の外に滿ちく〳〵て、落日のくれなゐは、蘇命路の山をうつして、綠は浪に浮島が、はらふ嵐に花ふりて、げに、雪を廻す白雲の袖ぞ妙なる。シテ「南無歸命月天子、本地大勢至。地「東遊の舞の曲。シテ「あるひは天つみ空の綠の衣。地「又は春立つ霞の衣シテ「色香も妙なり少女の裳。地「左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、靡くも反すも舞の袖。地「東遊のかず〳〵に、その名も月の色びとは、三五夜中の空に又、滿願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の愛鷹山や、富士の高嶺かすかになりて、天つみ空の霞にまぎれて失せにけり。

（觀世流謠曲）

天和元年
四代將軍家綱の時。（一六三四一）
松尾芭蕉
伊賀の人。江戸に出て俳名を揚げた。旅行を好み諸國を遊歷した。元祿七年歿、五十一歳

一八　草庵の芭蕉

天和元年九月のある日、松尾芭蕉は新しく移つた小さな家の濡緣に腰をかけて、一人淋しい自然を眺めて居た。

深川芭蕉庵の圖

江戸の郊外の晴々した空は、大きな湖の青い一枚の面のやうに、靜かに澄み湛へて居た。雲もない、風もない、たゞ明るい冷さが、大氣にも地上

にも滿ちてゐた。彼は自分の心鏡にも肉體にも、秋が深くなつてきた事を感じてゐた。

自分も隨分迷つたものだ、もがいたものだ。希望から焦慮へ、困憊から懊惱へ、人間として嘗めなければならぬ苦しみは大抵味つて來たのだが、それは春が過ぎ、夏が過ぎる如く、彼には過去つてしまつたもののやうに思はれた。餘に惶しさと煩はしさとの多い半生であつた。譬へば日かげもない野を、ぐん〳〵と毎日歩きつゞけてゐたやうなものであつた。そしてそれは生きる爲に唯一つの道であると思つてゐたのではあるが、今から考へて見れば、自分は生きようといふ意志にむきになり過ぎて、かへつて本當に生きられなかつたのであつた。自然のまゝに生かして貰ふといふ受身の氣持になりさへすればいゝのであつた。

さう思ひ當ると、嶮しい難路を强行して疲れきつた旅人が、自分の

深川　今は東京の區の名となつてゐる

一つ目　今本所區

尾張中納言　德川氏三家の一。名古屋藩主

太田攝津守　名は資次

小さな侘びしい家に戻り着いて、漸く落着くことが出來たやうな氣持であつた。彼は三十八歳の今になつて、初めて氣を張らずに、ほつと大きく息をつくことが出來る安らかさと寛ぎとを感じて居た。

芭蕉の新しい住所は、深川六間堀といふ所であつた。淺草川の東側に平行して、小名木川と一つ目の川とをつなぐ堀割を六間堀といひ、その附近の地も亦同じ名で呼ばれた。そこは下總國葛西領深川郷であつて、淺草川で江戸とは區劃されてゐるものの、近來の市中の發展につれて、大名・旗下の屋敷なども少からず建てられた。その中でも小名木川に近い所には尾張中納言・太田攝津守などの邸があるが、明地も草地もかなり殘つて居た。一體に地が低いので、池があつたり水たまりがあつたりする中に、ぽつねんと建てられた低い草屋がある。その家に芭蕉は自分の身を置いたのであ

大きな川
隅田川

つた。

彼は自分がほんとうに一人きりになつたといふ事を感じた。故郷の肉親からは遠く離れ、江戸にある門下生たちとも大きな川を隔ててしまつた。淋しいといへば淋しい。しかし、これは結局自分が當然行きつくべき所なのである。今までの自分は、あまりに世間に交りすぎてゐた。そのために本當に自分で自分の魂をぢつと見つめる時がなかつた。自分は自分を置くべき所でない所に身を置いて、徒に煩はしい思をしてゐたのである。今こそ靜に自分一人といふ所から出直して見なければならないので、孤獨はすべてのものゝ究竟の姿であるが、しかし又、孤獨はすべてのものの出發點であるべきだと思ふ。彼はこの孤獨をありがたいと思つた。そして心が引きしまるやうな氣がした。

彼がこの度の移居は、所謂隱棲であつた。それは名利を求めない、

自ら食ふためにすらも求めないといふ點で、まことに隱者の態度になつたのである。が、田螺のやうに自分の舊い殼の中に引籠つて、戸を鎖してしまふといふやうな隱棲ではない。反對に、自分についてゐる舊い殼を脫ぎすてなければならないと彼は思つた。この頃になつて彼は自分の心の底から一つの新しい世界が展けかゝつて來ることを豫感してゐた。その世界は彼の手によつて創造せらるべきものだといふ自信も釀されてゐた。それはほんたうに自分が歩むべき眞實の道が發見されたといふ喜びであつた。その道は實に淋しさうだ。しかしその道はもう紛れがなさうである。自分はその道をたづねつゝ、又その道を踏堅めて行く旅人として、今新しい出發點に立つてゐるのだと思つた。そして、魂が淋しい焰を揚げてゐるやうな靜かな興奮をさへ彼は覺えるのであつた。

六疊一間きりない小さい家も、芭蕉が一人の身を置くには十分であつた。西と南とが開いてゐるので暗さうである。縁に腰をかけて想に耽つてゐた芭蕉は、目を移して庭先の柳の木や桑の木の、冬が近くなつて、しよんぼりとしてゐる姿を親しげに眺めやつた。その木の影を長くのばした夕方の日ざしは、彼の全身をほつこりと包んでゐた。築のあとの池水はきら〳〵と輝いてゐた。そして遙の西の空には、すでに雪を戴いた富士が、小さいながら、くつきりと藍色に浮出てゐた。

（荻原井泉水――旅人芭蕉）

荻原井泉水　現代の俳人

元祿二年　東山天皇の御代

草加　武藏國足立郡奥州街道にあたる

一九　奥の細道

ことし元祿二とせにや。奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひ立ち、耳にふれて、いまだ目に見ぬ境、もし生きて歸らばと定めなき頼みの末をかけ、その日やうやく草加といふ宿にたどり着きにけり。

痩骨の肩にかゝるもの、まづくるしむ。たゞ身すがらにとたちいでたるを、紙子一衣は夜のふせぎ、ゆかた・雨具・墨筆のたぐひあるはさりがたき贐などせられたるは、さすがに打ちすてがたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。心もとなき日數かさなるまゝに、白川の關にかゝりて、旅心さだまりぬ。「いかで都へ」と、たよりもとめしもことわりなり。中にもこの關は、三關の一にして、風騒の人心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉をおもかげにして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨のはなの咲きそひて、雪にも越ゆるこゝちぞする。

それより野田の玉川・沖の石を尋ね、鹽竈の浦に入相の鐘を聞く。五月雨の空いさゝか霽れて、夕月夜幽かに、籬が島も程近し。蜑の小舟漕ぎつれて、魚わかつ聲々に、「網手かなしも」とよみけん心もしられて、いと哀れなり。早朝、鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられ

いかで都へ　便あらばいかで都へつげやらむ今日白川の關はこえぬと（拾遺集平兼盛）

秋風を云々　都をば霞と共にたちしかど秋風ぞふく白川の關（後拾遺集、能因法師）

紅葉を云々　都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白川の關（千載集、源頼政）

雪にも云々　しぐれつる雪を外山に分けすてて雪に越えゆく足柄の關（新拾遺集、卜部兼直）

網手かなしも　世の中は常にもがもな渚こぐ蜑の小舟の網でかなしも（新敕撰集、源

て、宮柱太しく、彩椽きらびやかに、石の階九仞に重なり、朝日の影玉垣をかゞやかす。かゝる道の果、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ、我が國の風俗なれと、いと貴し。神前に古き寶燈あり。かねの戸びらに、面に「文治三年和泉三郎寄進」とあり。五百年前の俤、今目の前にうかびて、そゞろに珍し。彼は義勇・忠孝の士なり。佳名今にいたりて慕はずといふことなし。誠に人は能く道を勤め義を守るべし。名も亦これに從はん。日既に午に近し。船を借りて松島に渡る。その間二里餘。雄島の磯に着く。

そも〳〵事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好景にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數をつくして、欹つものは天を指し、偃すものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重にたゝみて、左に分れ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠こまやかに、枝葉、潮風に吹きたわめられて、屈曲おのづから撓めたるが如し。その氣色、宵然として美人の顏を粧ふ。ちはやぶる神のむかし、大山つみのなせるわざにや。造化の天工、何れの人か筆を揮ひ詞を盡さん。

雄島が磯は、地續きて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木蔭に、世を厭ふ人なるべし、落穗・松笠など打ちけぶりたる草の庵しづかに住みなせり。いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく立寄るほどに、月、海にうつりて、畫のながめまたあらたまりぬ。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。平泉へと心ざし、あねはの松・緒だえの橋など聞き傳へて、人跡稀に、雉兎・芻蕘の往きかふ道、そこともわかず、つひに路ふみたがへて、石の巻といふ港に出づ。「こがね花咲く」とよみて

頼朝　國守　仙臺侯伊達綱村
和泉三郎　藤原秀衡の二子忠衡
洞庭　支那湖南省岳州にある湖
西湖　支那浙江省杭州にある
雲居禪師　元和中の人、松島瑞巌寺の中興の祖
平泉　陸中國西磐井郡
石の巻　陸前國牡鹿郡北上川の海門
こがね花さく云々　すめろぎの御代榮えむと東なるみちのく山に黄金花さく（萬葉集、―大伴家持）

奉りたる金華山、海上に見わたされ、數百の廻船、入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ちつゞきたり。思ひかけず、かゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。やうやくまどしき小家に一夜を明かして、あくれば又しらぬ道まよひ行く。袖のわたり・尾ぶちの牧・まのの萱はらなどよそ目に見て、遙かなる隄を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に到る。その間廿餘里ほどとおぼゆ。

戸伊摩　陸前國登米郡トヨマ登米町

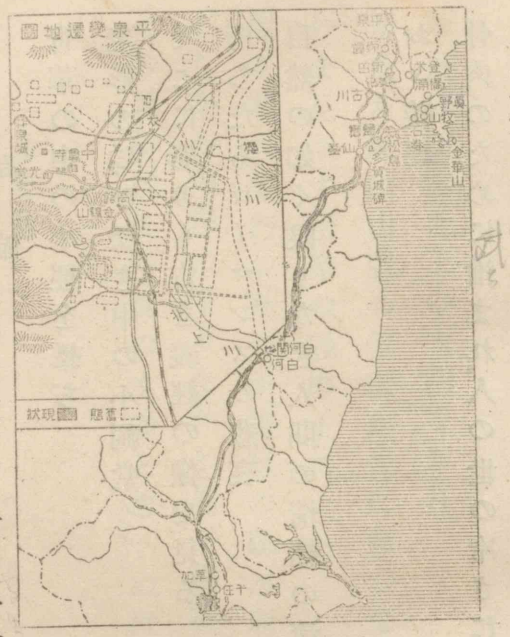
三代　清衡　基衡　秀衡

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形を残せり。まづ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河におち入る。泰衡が舊跡は衣が關を隔てて、南部口をさしかためて、夷をふせぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となれり。「國破れて山河あり、城春に

國破れて云々　國破山河在、城春草木深（杜甫）

して草青みたり。」と、笠うちしきて時のうつるまで涙を落しぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡



かねて耳驚かしたる二堂開張す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉、風にやぶれ、黄金の柱、霜・雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新たに圍みて、甍を覆ひ風雨を凌ぐ。暫く千歳の記念とはなれり。

五月雨のふり残してや光堂

（松尾芭蕉――奥の細道）

二〇　夢のあと

高館

青草の中の小徑を攀ぢ
老杉の匂ひ深き中の小祠堂
そこに彩りも古き義經の像を見る
朽ちたるローマンスの悲哀
自然の如く限りなき人間の情緒の流は心を打つ

おゝ義經
骨肉のために憎まれ、人の世の冷さに泣く落人
こゝに安住の幸福を見出したと思ふ間もなく
攻められてこの丘の上に戰死したのであるか

韃靼　蒙古の東南部

蝦夷に渡つたのであらうか、また遙に韃靼に赴いたのか、
孰れにせよ夢の如く遠き歴史の示す悲しい事實を私は感ずる

斷崖の下を北上の大河ながれ
かなたには山脈の翠微が光に煙つてゐる
いま見下す河岸の砂の上に
誰が踏んで行つたのか、裸足の跡が明かに幾つも殘されてゐる
どこから河岸に下りたかと思ふ程斷崖は高く
その足跡はこの世のものと思へぬほど遠くなつかしく見える

金色堂

眉白き九十の老僧は
能の翁の面さながら

慄へる枯枝の如き手に
金色堂の朽ちたる扉を開く

げに三代の榮華は夢の如く
三尊の佛は黑と金に音もなく瞬き
老僧は慕はしげに私に護符を賣つたが
私はその小さい紙片を何のために身につけようかと困却する
おもへば二十年に近き昔のことである
如何にかの老僧が長生きしようとも
今も生きてゐるとはどうしても思へない
金色堂の內部に見た過ぎゆく者の悲哀は
あらゆるもの、あらゆる人のなかにある（白鳥省吾――日本詩人）

白鳥省吾　詩人。宮城縣の人

其角　榎本氏。後に寶井と稱した。江戸の人。芭蕉の門人

許六　森川氏。近江彥根の藩士、江戸に出て芭蕉を師とした

二一　元祿調

春

草臥れて宿かる頃や藤の花　芭蕉
鶯の身をさかさまに初音かな　其角
四條から五條の橋やおぼろ月　許六

夏

五月雨を集めて早し最上川　芭蕉
夕立や家をめぐりて家鴨なく　其角
負うた子に髮なぶらるゝ暑さかな　園女

秋

あら海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉

名月や疊の上に松のかげ　其角
くやみいふ人のとぎれやきりぎりす　丈草

冬

木枯や地にも落さぬ時雨かな　去來
行燈のすゝけて寒き雪の春　越人
ながゝと川一筋や雪の原　凡兆

丈草　内藤氏。尾張犬山藩の重臣　芭蕉の門人
去來　向井氏。芭蕉の門人。俳號落柿舍
越人　佐分利氏。熊本の藩士。芭蕉の門人
凡兆　加賀の人、芭蕉の門人

二二　千里が竹　その一

船路の末も知らぬ火の筑紫は雲に埋めども、あとに擁護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地に着きにけり。

鄭芝龍一官は、故郷に歸る唐錦、裝束引きかへ妻子に向ひ、「我が本國といひながら、時遷り代變り、天下悉く李蹈天が引入れにて、韃

親子　鄭芝龍と其の子鄭成功
李蹈天　明朝の將軍。後に韃靼に内應して明帝を殺した

韃夷の奴となり、昔の朋友、一族とて、誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が、生死の樣子も知れざれば、何を以て義兵の旗を擧げ、何處を一城に立籠るべき處もなし。　然るに、某去んぬる天啓五年、此の國を立退き、日本に渡る時、二歳になりし娘の子を、乳母の袖に捨置きしが、其の子が母は產落して當座に死す。　かくいふ父は、八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の惠に長ずるごとく、天地の父母の助にや、成人して今吳將軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となれる由、商人の便に聞及ぶ。　賴む方はこればかり。　親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、聟の甘輝も易易と賴まるべし。　これより道の程百八十里、打連れては人も怪しめん。　われ一人道をかへ、和藤內は母を具し、日本の漁船の吹流されしと、頓智を以て人家に憩ひ、おつつくべし。　これよりさきは、音に聞ゆる千里が竹とて、虎の栖む大藪あり。　それを過ぐれば潯陽

吳三桂　明朝の忠臣。司馬大將軍
天啓五年　明の嘉宗の時（一六二五年）
娘の子　錦祥女
吳將軍甘輝　明の將軍。韃靼に降つたが程なく鄭芝龍に應じた
潯陽の江　支那江西省九江府の邊で揚子江を呼ぶ稱

赤壁　支那湖北省武昌府嘉魚縣

東坡　宋の詩人蘇東坡

の江、これ猩々の栖む處。風景聳えし高山は、赤壁とて昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。其の赤壁にて待揃ひ、萬事を牒し合すべし。」と方角とても白雲の、日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。教に任せ和藤內、人家を求め忍ばんと、かひ〳〵しく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ぎし瀧つ波、とび越え跳越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣々たる、千里が竹に迷ひ入る。和藤內ほうと我をぬかし、「なう母じや人。此の脛骨に覺えたり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行けば行く程藪の中。むう、分つたり。方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴。」と、根笹、大竹押分け蹈分け、尙奥深く行く先に、怪しや數萬の人聲、攻鼓、攻太鼓、喇叭、ちやるめら高音をそらし、ひやう〳〵とこそ聞えけれ。「すは、我々を見咎めて、敵

虎嘯けば云々　虎嘯而谷風至龍擧而景雲屬（淮南子）

楊香　晉の人。十四歳の時赤手虎を搏して父の厄を救つた

の取卷く攻太鼓か、又は狐のなずわざか。」と、茫然たる其の折ふし、空凄じく風起り、砂を穿ちどう〳〵、竹葉さつと卷立て卷立て、吹折る竹は劍の如く、凄じなんどもおろかなり。

和藤內ちつとも臆せず、「讀めたり〳〵、さては異國の虎狩な。あの鐘、太鼓は勢子の者。こゝは聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る。猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は、孝行の德に因つて、自然と逃れし惡虎の難。其の孝行には劣るとも、忠義に勇むわが勇力、唐へ渡つて力はじめ、神力ます〳〵日本力、双で向ふは大人氣なし。虎はおろか、象でも、鬼でも一挫ぎ。」と、尻ひつからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も、畏れつべうぞ見えてける。

案に違はず吹風と、共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に面をすりつけすりつけ、岩角に爪磨ぎたて、二人を目がけいがみ懸るを事ともせず、弓手に擲り、馬手に受け、捩つて懸れば身をかはし、撓めばひら

りと乘移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえいえいえい、虎の怒り毛、怒り聲、山も崩るゝ如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛を毟られ、兩方共に息つかれ、石上に突つたてば虎も岩間に小首を投げ、大息ついたる其の響、鞴吹くが如くなり。

近松門左衛門

母藪蔭より走り出て、やあ〳〵和藤内、神國に生れて、神より受けし身體髮膚、畜類に出合ひ、力立して怪我するな。日本の地は離るゝとも神はわが身にいすゞ川、大神宮の御祓、納受などか無からんや。」と、肌の護符を渡さるれば、「げに尤も。」と押戴き、虎に差向け差上ぐれば、神國神秘の其の不思議、猛りに猛る威勢も、忽ち尾を伏せ耳を垂れ、じりゝじりゝと四足を縮め、恐れわなゝき岩洞に匿れ入る、尾筒を攫んで跳返し、打伏せ打伏せ、ひるむところを乘つかゝり、足下にしつかとふまへしは、天の斑駒素戔嗚尊の神力、天照す神の威德ぞ有難き。

二三　千里が竹　その二

かゝる所に勢子の者、群り來る其の中に、大將と覺しき者大音擧げ、「やあ〳〵うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。其の虎は忝くも、主君右將軍李蹈天より、韃靼王へ獻上のため、狩出したる虎なるぞ。早々渡せ。異議に及ばゝ打殺さん。しやぐわん、しやぐわん」とわめきけり。李蹈天と聞くよりも、願ふ所と笑壺に入り、「やあ餓鬼も人數、しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。さほど欲しがる虎ならば、主君と賴む李蹈天とやら石花菜とやら、こゝへ突出し詫言させい。ぢきに逢うて用もある。さもない内はいつかなこと、ならぬならぬ。」とねめつくる。「やあ、物

ないはせそ、討取れ。」と一度に劔をはらりと拔く。「心得たり。」と護符を虎の首にかけ、母の側に引据うれば、繫ぎし如くに働かず。「おゝ心安し。」と太刀差翳し、群る中へ割つて入り、八方無盡に割立て割立て、撫でまくる。

勢子の大將安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄餘さじ。」と、一文字に切りかゝる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起き て身慄し、敵に向ひ齒を鳴し、猛り唸りて飛懸る。「こは叶はじ。」と安大人、勢子の者が差いたる劔、かり鉾、數槍、手に當るを幸に、投附け投附け打ちかくる。虎は神力自在を得、劔を宙に引銜へ、引銜へ、岩に打當て微塵になす。叉の光、玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物盡くれば官人ども、色めき立つて逃惑ふ。後より和藤內、「どつこい遣らぬ。」と顯れ出で、安大人が素首を掴んで差上げ、くる〳〵と振廻し、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。

此の勢に官人ばら、後へ戻れば惡虎の口、先へ行けば和藤內、仁王立に突立つたり。「あゝ、申し御堪忍、御免々々。」と手を合せ、土に食ひつき泣きゐたり。和藤內虎の脊を撫で、「うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手並覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に成長せし和藤內とは我が事なり。先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故鄕へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば味方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か。」とつめかくる。「なう、何の否で御座りませう。韃靼王に從ふも、李蹈天に從ふも命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情賴み奉る。」と、地に鼻つけて畏る。

「おゝ、出かした出かした、さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、指添の小刀はづさ

せ、是も當座の早剃刀、母も手々に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端剃るやらこぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次第、瞬く隙に剃りしまひ、二櫛半のはらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顏を見合せて、頭冷つく風引いて、「嘘々、村雨々々。」と、涙を流すぞ道理なる。　親子どつと打笑ひ、「揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて何左衞門、何兵衞、太郎、次郎、十郎まで、面々が國所頭字に名乘り二行に立つてぼつたてろ。「承り候。」と、お先手の手振の衆、ちやぐちう左衞門、東蒲塞右衞門、呂宋兵衞、東京兵衞、暹羅太郎、白城次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉九郎、もうる左衞門じやが太郎兵衞、さんとめ八郎、英吉利兵衞、今參のお供先、跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の、名を取る、口取る、國を取る、譽は異國、本朝に、蹈跨げたる鞍鐙、虎の脊中に打乘つて、威勢を千里に顯せり。

（近松門左衞門――國姓爺合戰）

近松門左衞門　號は巢林子。有名な淨瑠璃作者。享保九年歿、七十二歳

二四　芳宜園大人の靈を祭る

芳宜園　加藤千蔭。文化五年、七十五歳

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて、芳宜園の大人のおくつきの御前に菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを燒きて、うなねつきて申さく。　あはれ悲しきかも。　君は吾に十といひて一とせのこのかみにおはするなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齡におはして、吾はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、あしたに參るとては君のみはかしのしりへに從ひ、ゆふべに罷るとては君の御袖のもとに縋りて、相うるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならん。　書讀むとては君を師ともたふとみ、歌作るとては我をおとといのつらにぞ教へ給ひける。

中頃にして、君は仕の道に暇なくおはし、吾は世のさがにかゝづら

ひて自ら跡き方にも過ぎつるを、君仕をしぞき給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては吾道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乘り、憂き事も共に憂へ、喜ばしき節も共に喜びて、世にありふる業のまめごともあだごとも、かたみに隔なく心をかはしつること、今にはたとせ。其の初を繰返し數ふれば、あひ友たること既に五十年にぞ餘りける。さるを今おくれたてまつりて、いつの世にか相見ん、何れの時にかことはん。常無きは人の身の習ぞと知れ

橘千蔭

くひぜを云々

宋人有二耕レ田者一田中有レ株兎走觸レ株折レ頸而死[内]釋二其耒一而守レ株冀二復得一レ兎（韓非子）

舟にきだつくる云々

楚有二涉レ江者一其劍自二舟中一墜二于水一遽刻二其舟一曰是吾劍所二從墜一也（呂氏春秋）

ど、これをいかでか歎かざらん、かゝるを誰かよく堪へん。あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下りゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今を捨てて古に復り、青雲の高き心しらひを求め、賤機の文あるみやびごとを尊みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥みこゝにひかれて、尚怪みとがむる類は多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なりしを、君ひとり心を起して、普く諭し廣く誘ひしより、近き人は目のあたり相うづなひ、遠き人は遙に靡き來て、古ぶりの歌世に盛りになりにたるなり。其の自ら詠みいで給へる歌を見るに、古きしらべ新しき姿、とりどりに備らざるはなし。其の古を寫せるは藤原・寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは、堀河・鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に盡さざる事なく、目に觸るゝものは言の葉にのせざる事なんあらざりける。これを見てたかきもみじかきも、めで尊まざる人

なし。又事好みの人は、其の名を知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひと歌を得ては、價なき寶にも代へじといひてぞ深く喜びける。然るを今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬるは、わがどちの歎のみかは、大方の世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜まざらん、かゝるを誰かは慕はざらん。あはれ悲しきかも。わがかく言擧するを、泉の下にもさやかに聞召し、天翔りても遙に見そなはせとなん申す。（村田春海――琴後集）

村田春海　賀茂眞淵の門人。國學者、文化八年歿、六十六歳

二五　富士の嶺を詠める歌ども

富士の高嶺はわが國のしづめともいひ傳へて、異山にすぐれたることは、言出でんも今更なることなりや。この山を詠める古歌、萬葉集よりはじめて、世々の勅撰、私集に入りたる名歌ども、あげて數へ盡し難し。古はおきていはじ。近く、水無瀬中納言氏成卿の富士百首といふものあり。世に知る人なし。近き頃もとめえたるに、

西の海やもろこしさして行く船の
うへにもふじはいくか見るらん

わすれては空にも雪のつもるかと
見れば雲間にはるゝ富士の嶺

これにならへる契沖阿闍梨の百首、長流隱士の三十首、いづれも珍しく巧によみかなへられたり。縣居翁の長歌殊にたへにして、人麿・赤人のにも、をさ〳〵劣れりとは見えずぞある。あがたゐの長歌の反歌に、

するがなる富士の高嶺は雷の
音する雲のうへにこそ見れ

ふじの嶺の麓を出でてゆく雲は

契沖阿闍梨　號は圓珠庵。歌人、國學者。元祿十四年寂、六十三歳

長流　下河邊氏。和の人。國學者、貞享三年歿、六十三歳

足柄山のみねにかゝれり

また紀行の中に、

いつの世のちりひぢよりかなり出でて
ふじははちすの花と見ゆらん

三首ともに秀逸ときこゆ。

また荷田東萬侶大人の歌に、

きゝしよりも思ひしよりも見しよりも
登りてたかき山はふじのね

枝直（加藤氏）が歌に、

天のはら照る日に近き富士の嶺に
いまも神代の雪はのこれり

芳宜園の歌に、

はこねぢや神のみさかをこえ來ても
なほふじのねはくもゐなりけり

わが師（村田春海）の歌に、

心あてに見し白雲はふもとにて
おもはぬ空にはるゝふじのね

この歌さまでの秀逸とも思はざりしに、いにし文化四年、おのれ伊豆のいでゆあみがてら、熊坂の里なる竹村茂雄が許に志して旅だてる頃、熱海のいでゆを出でて、弦巻山の頂にかゝりしに、浮雲西の空にたちかさなりたりしかば、伴なへる人に對ひて、「ふじは何處の雲のあなたにかあたりて見ゆる。」と問ひしに、遙に指ざして、「かしこの雲中にこそ。」といふほど、いつしか浮雲はれのきけるに、その指ざし教へたる雲よりは、はるかに高く空に聳えて、ふりあふぎ見るばかりなりしかば、さてそのときぞ、師の歌を思ひ出でて、めできこえ

熊坂（修善寺村の管内）竹村茂雄（國學者、宣長及び春海の門人）

たりき。

（清水濱臣――泊洒舍文集）

清水濱臣　醫を業としたが、和歌國文を好み村田春海に學んだ。文政七年歿、四十九歳

テームス　イングランドの北から流れロンドン市を貫いてイギリス海峽にそゝぐ

ウエストミンスター橋　テームス河にかゝる大橋

ウォーターロー　テームス河を隔てて國會議事堂と相對する側にある

ウエストミンスター寺　議事堂の隣にある大寺。國家の功臣をこゝに葬る

二六　ボンフィールド女史

どんよりと曇つた晩秋の日の下に、テームスの流が漫々として海に流れてゆく。ウエストミンスターの大きい橋の袂に佇んで見渡すと、煙で煤け黑ずんだ煉瓦の建物が、この廣い流の兩岸に、見渡すかぎり連つてゐる。對岸のウォーターロー停車場の方には、勞働者の住家らしい小さい煉瓦の家が、ごた〳〵立並んで居る。こちら岸の左手に有名な稅務廳があつて、その前の廣い道が、ロンドンのバンク通である。遊子の佇む右手に高くイギリスの國會議事堂が聳えてゐる。その前の廣庭を隔てて、ウエストミンスター寺院がある。その議事堂の中ですぐれた仕事をなした人たちが、その寺院の中に葬られていくのである。

だれでもロンドンに行く人は、この橋のほとりに立つて深い感慨にうたれないものはあるまい。三年前の秋の一日、自分はイギリス勞働黨の本部を訪問しての歸るさ、やはりこのテームス河のほとりに來て、灰色の空を映しながら海へ海へと流れてゆく水を見て、色々の事を考へた。世界の形勢が激流のやうに迸つてゆく時、イギリスだけは何故に、このテームスの流のやうに、漫々と落ちついて進むのであらうかなどと思つた。一刻も休みなく、ひた押しにいくのがイギリスといふ不思議の國のやり方である。フランスや、アメリカや、ロシヤが駈足で飛んで行つては、また彈かれたやうに引返すうちに、イギリス國民だけはぢり〳〵と前に進んでいく。ちやうど貧しいイギリス人たちが、對岸の勞働者の長屋の中に產れては、この長い橋を渡つて議事堂に入り、やがて死んではウエストミンスター寺院に葬られていくやうに、イギリス全體が危

げの無い足取で、世界歴史といふ大きい道路の上をしつかりと歩いて行く。

イギリス人は三百年このかた、全世界の先頭に立つて歩みをつゞけてゐる。そしてまだ一向に疲れた樣子を見せない。それはこの灰色の雲の垂れた國の中から間斷なく偉い人物が出て來るからである。ミス、マーガレット、ボンフィールドの如き人物が、後から後からとひつきりなしに出て來るからである。

「いよ〳〵イギリスに勞働黨内閣が出來る。」といふロンドン電報を見たとき、自分は思はず「おやつ」と叫んだ。この内閣の出現は太陽が毎日東から昇る程に自明の理であるが、これほど早く出現しようとは思はなかつた。そしてあの議事堂から遠からぬエクルストン、スクエアーにあるイギリス勞働黨の三階建の家を思ひ出した。あの質素な建物の石段を、どんなに大勢の人が上り下りしてゐるのであらう。そしてそれが、今までのイギリスの爲政者とは全く違つた服裝、風采の人であることが、しみ〴〵と考へられた。

鼠羅紗のスートを着て、黑い鳶色の毛絲の細い首卷を無雜作に首のまはりにひつかけ、焦茶の羅紗の帽子を被つて、地味な羊毛の靴下に黑茶の半靴、ふるぼけた革の手提袋には書類が一杯入れてあるのを手に、瘠形の赤い顏色の五十恰好の婦人たちが、わき眼もふらずに、さつさとこの石段を上つて本部の中へ入つて行く。その一人がボンフィールド女史である。イギリスの社會運動に從事する婦人たちには、一種共通の型があるので、自分は寫眞を見ただけで、女史の全體の輪廓がはつきりと眼に浮んでくる。

女史は婦人らしい感情をもつて、周圍の人々から敬愛されてゐた。しかし女史は同時にすぐれた頭腦の持主であつた。女史の事業は三十幾年の努力によつて成されてゐるが、その立案なるものは、

一　婦人勞働者の增加の結果として、勞働者の地位の遞下を來さしめぬこと。

二　婦人の從事する勞働のために、人間として、殊に將來の母としての能率を、精神的にも肉體的にも減退せしめぬこと。

三　全產業組織を、より人道的のものとすること。

等であつて、その生涯は、實に婦人勞働者のために捧げられたものである。

そして、この問題の達成のためには政治的に勞働者の地位を改善する必要があるといふことを認めた女史は、昨年十二月廿六日にイギリス保守黨內閣の下に行はれた總選擧に於て、奮然立つて下院議員の候補者となつた。

この選擧に於て名乘をあげた婦人候補者は、全國に於て三十四人に及んだが、その一人が女史で、女史はノーザンプトン選擧區から

昨年　大正十二年

ノーザンプトン　イギリスの西部に在る都會ロンドンの西北約六十哩

出て、一萬五千五百五十六票といふ高點を得、次點者に對して實に四千三十六票の多數を占めて當選した。而して代議士となるや一ケ月で、勞働黨內閣が成り、女史は擧げられて勞働省次官として大臣を補佐する重要なる政務官の地位に就いたが、婦人にしてかかる高官に上つた者は、女史を以て嚆矢とする。

女史の勞働問題に對する造詣は、イギリスの男子中にも多くの類を見ない。故に最初の婦人政治家として、大いに治績の見るべきものがあらうとは、天下の等しく期待する所である。そして政治・外交の各部門に於て範を列國に垂れたイギリスは、今や勞働運動の歷史に於て、世界の人文史上に一大痕迹を殘さうとしてゐる。

その先頭に立つ一人の婦人として、ボンフィールド女史の負ふ責任は頗る重いといはなければならぬ。

從來は感情の世界にのみ隱れてゐた婦人が、かうして理知と意力

との世界に立つて、男子と平等の立場を占め、その特有の力によつて、世界人文の發達に貢献しようとしつゝあることは、遲蒔ながら、人類が、有史以來六千年の歳月を經て、進化の階級を一つ登つたものとして、慶賀せざるを得ない。

（鶴見祐輔氏の文による）

二七　光あれ

人間はあまり此の世界に慣れすぎた。何物も、今ある如く昔から存し、萬事總べて成行のまゝになるものとして敢へて怪しまず、その日その日を過す。

兒童は世界新來の客として、驚異の眼を瞠つて事々に疑問を起し、何者に對しても起原或は聯絡の説明を求めるが、それも次第に世に慣れ、漸次に説明をつけて、終には疑をも起さず、好奇心をも動かさなくなる。然るに若し人あつて、俄に此の世に生れ、而も成熟した心を以て四圍の世界を覽、人生の事を考へたならば、世界の一事一物、皆驚歎の種となり、疑問の材料となるに違ひない。

その疑問に對して、今日の科學はそれ〴〵説明を與へはするが、さて萬事萬物の究竟起原となれば、無始無終といふより外はない。進化論で説明しても、其の至極の始は、終に混沌の闇に入らざるを得ない。こゝに於てか、我等の想像力は、大能の神靈が世界を創造する始といふ事を想はしめる。ユダヤの神話、創世記の開卷は此の想像を述べて曰く、

創世記（舊約全書の中にある）

始に神天地を造り給へり。地は形なくして空しく、闇、淵の面にあり。神の靈、水の面を覆ひたりき。

萬有渾沌として、天地は一の闇の中に閉ぢられた、水とも雲とも分かぬ濛氣が全宇宙を籠めて居た。そこへ、闇の中に、

神「光あれ。」と宣ひければ光ありき。神は光と闇とを分ち給へり。

夕あり、朝あり、これ首の日なり。

嗚呼、此の一言ほど有力な又不思議な言葉が他にあらうか。一言で常闇の天地に光明が生じ、未來億萬年に亙るべき晝夜の區別が出來た。それから、神が「水あれ。」と云へば、水が出來、天の大空と地の大海とが二つに別れ、又神が土といひ、青草といひ、鳥を呼び、獸を呼べば、一切萬物が其の聲に應じて生ずる。かくして天地と萬物とが成立つたと云ふ。

此は神話であり、想像である、從つて、萬物成立の說明としては、我々の理性には合はない。併し、理性的說明のみが唯一の解釋であるとはいへず、又宇宙の始のみが、「光あれ」の言に發したとする必要もない。此の如き創造の事實は、我々の生活に於て日々に經驗し得ることではなからうか。

人の心は物に引かれ、事に動かされ、四圍と共に變じ、事情に隨つて推移して、止る所を知らず、見る物、聞く事、一として全然自分で支配し得るといふものはない。其の上、思ふ事、欲する所も、變轉もすれば突發もする。由つて來る所を知らず、落ちつく先も、自分ながらに測り得ない。意馬は隱見し、心猿は跳梁する。若し自然に任せるならば、吾等の心は亂雜變轉の世界に彷徨する外なく、唯現在刹那の意識は明かでも、其の前後左右は混沌の大溟に沒する外ない。然るに、そこに何か心を統御するに足る觀念が浮び、又は精神の底に透徹する靈感に接し、或は一生を支配すべき理想を體得すれば、混沌の闇は觀念理想の光明に破られ、精神の世界は靈の朝ぼらけに目がさめる。此の如き精神の靈感は、聲こそなけれ、實に「光あれ。」の天籟にも比すべき創造力を發揮して、今まで意馬心猿の跳梁に委した混沌は、光あり、力あり、一貫の命ある宇宙コスモスとなる。

かく觀じ來れば、創世記の空想は單に世界萬物の始を說いたもの

でなく、刹那々々の我等が心にも起るべき大創造を描き、我々各個の心靈が發揮し得べき原造の事實を示したものと思はれる。

浮世の紛々に心亂れ氣濁つた時、我が心に斯くすべしとの決斷を得たならば、是世務の混沌を照す光でないか。天地萬象を研究し、難題疑問の中に針路を失つて五里霧中に彷徨する際、一條の理路を發見し、快刀亂麻を斷つて眞理の光明に逢着するも、亦「光あれ」の不思議であるまいか。若しくは又、藝術家が天然人事の中に美の靈を捕へ得て、畫帖の上に、又は木石の中に、之を表現する時、「光あれ」の創造力を示すではないか。音樂家が天來の音に心耳を澄まして之を樂譜に捕へるのも、詩人が靈感を歌ひ出すのも、亦「光あれ」の一聲、混沌の世界を破るに等しいものがあるであらう。

精神の創造力、是いつまでも正體の捕はれない不思議であるが、而もまた實に人生に於ける高き貴きゆかしき生命の源泉である。

萬物の生々を貫いて生命あり、世事の紛々を超えて光明ある人生の眞味、人間の眞價値は、一に此の創造力の賜ではないか。特に信念生活の力は、紛擾多端、罪障重疊の人生に直入の一路を開き、智慧の光で無明の暗を破り、慈悲の暖かみに煩惱の水も解かす。攝取の光明といひ、救の恩寵といふも、一に此の小我が宇宙の大神靈と感應道交して、混沌の中に「光あれ」の御言に接する經驗を指すに外ならぬ。

思へば、人生始つて以來、無常の世相を超えて常住の光明に浴し、破綻百出の人生に一貫の理想を發見し、五十年蜉蝣の此の生にも永遠の生命を實にし得た人にして、其の信念開發の大事に際して混沌の闇の中に「光あれ」の言に接した思をなさなかつた者が、果してあるであらうか。信念の力はこゝにある。人生の價値は、實に此の如き光明の新生命が齎すのである。「光あれ。」これ單に太初の

創世に限らぬ。人生美はしきものあり、眞理に順ふ生活あり、理想の力が現れる處には「光あれ」の御言が常にきこえ、其の不思議の創造力が絶えず躍動しつゝあるのである。

（姉崎正治――光あれ）

姉崎正治
號は嘲風。文學博士。東京帝國大學教授

大正女子國文讀本 上級用卷下終

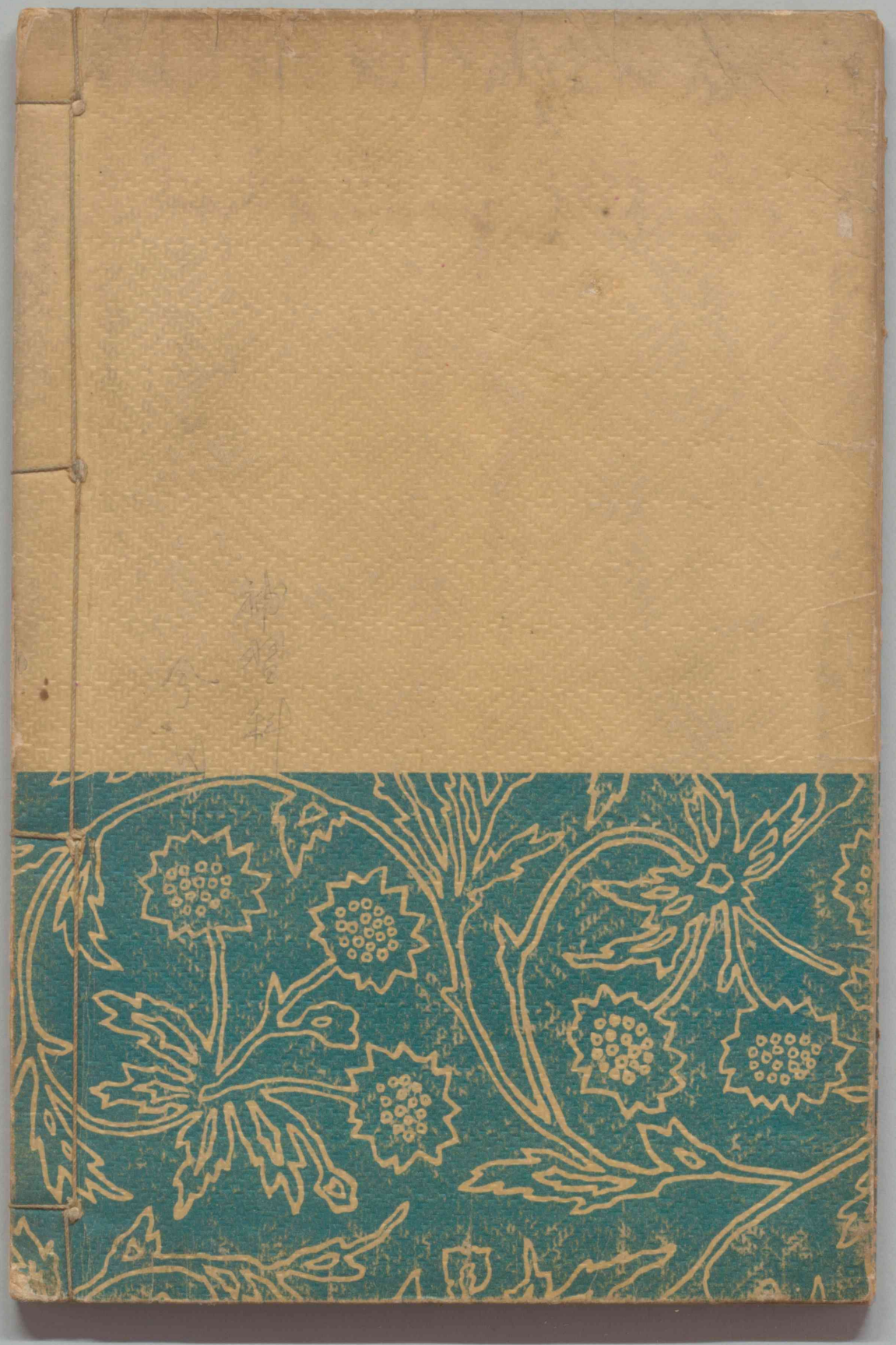
大正七年九月廿八日　發行
大正七年十二月十五日　訂正再版發行
大正十二年一月廿二日　修正再版發行
大正十三年九月十日　第二修正發行
大正十四年一月五日　第二修正訂正印刷
大正十四年一月十日　第二修正訂正發行

大正女子國文讀本第二修正版　全拾册
上級用卷下　定價金貳拾九錢
大正十四年度臨時定價　金五拾貳錢

著作者　東京市外中野大塚字六百二十五番地　保科孝一
發行者　東京市牛込區白銀町貳拾九番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　佐久間衡治
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市牛込區白銀町二十九番地　振替口座（東京）七四二番　合資會社育英書院
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座（東京）二八〇九番　目黑書店

著作權所有

大正十五年臨時定價金四拾九錢

Imada